官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN新・日本代表プログラム～
【拠点形成支援事業】いしかわ高校生グローバル人材育成推進事業　2025年度（第10期）

探究事例集

No	留学先国・地域	探究活動の問い
1	フィリピン	音楽は人生をどう変えるか？～音楽教育の可能性を探る～
2	カナダ	生成AIをどのようにして学習に取り入れることができるのか？
3	インドネシア	インドネシアの水質汚染問題に対し、珪藻土を使った濾過技術は、どのように持続可能な解決策として機能するか？
4	オーストラリア	日本とオーストラリアのテニスの指導方法の違いとは？
5	オーストラリア	世界で戦える人材を育てる”競泳環境”の本質に迫りたい
6	フィンランド	どうすれば、日本でも多世代交流も含めて、プレイパークを「地域の日常に根差した居場所」として継続的に機能させる仕組みを作れるのか そのために、フィンランドの制度や支援体制から学べることは何か
7	アメリカ合衆国	スマートシティ導入や能登復興について、私たちが発信し伝えていくべきことは何か？
8	オーストラリア	伝統文化「獅子頭」で栄える石川県を実現するには？
9	カナダ	海外観光客数を増やすために、能登の伝統工芸の魅力を効果的に発信するには？
10	英国	イギリスの人々がもつ地震観は日本の人々がもつものとどのように異なり、イギリスの人々が地震に関して、より安心安全に日本に訪れられるようにするにはどのような対策が必要なのだろうか？
11	フィリピン	日本とフィリピンの循環型経済の違いは何か。
12	オーストラリア	実践的な英語を身につけ、石川県の人口減少を食い止める方法を思考する
13	ニュージーランド	ジェンダーにおけるニュージーランドと日本の違いはどんなところにあり、それはどうすれば埋めることができるのか？
14	英国	社会保障制度の充実は幸福度ランキングに関係があるのか
15	ニュージーランド	主体性を引き出すニュージーランドの探究型学習は、日本とどのように異なるのか？ また、日本に導入するために必要な取り組みは何か？
16	オーストラリア	オーストラリアの人々は、動物や環境をどのように守っているのか？ 人と動物が共存するために大切なこととは？
17	アメリカ合衆国	能登に人の流れを持って来るには？
18	オーストラリア	砂浜の美しさを保つためにオーストラリアではどのような取り組みを行っているのか また、海洋汚染にどの程度の関心と意識をもっているか
19	カナダ	”石川から日本へ　新たな子育ての在り方をめざしてカナダの子育てから得られるヒントは？”
20	シンガポール	災害時にも安定して水を利用できる日本の社会を目指して、シンガポールの水再利用技術や分散型インフラはどのように応用可能か？

No	1

(1)探究活動の問い		音楽は人生をどう変えるか？～音楽教育の可能性を探る～		
(2)探究活動の背景・動機・目的		私は楽器を演奏しているとき、この上ない幸せを感じる。私は音楽を、国も言葉も文化も超えられる、素晴らしいものだと考えている。世界中の人と、音楽の素晴らしさ、楽しさを共有することが私の夢だ。 昨年夏、家族とマニラを訪れた。初めてスラムというものを目の当たりにし、自分とのギャップに、衝撃を受けた。治安や衛生面はもちろんだが、特に、そこに住んでいる子どもたちが十分な教育を受けられていないことが衝撃だった。日本で当たり前に学校に通っている自分、スラムでその日を生きるのに精一杯な子どもたち、その差を考えると、非常に胸が痛んだ。以降、自分の大好きな音楽で、何か支援できないか、と考え続けている。今回の留学では、音楽が子どもたちの人生にどのような影響を与え、人生を変え得るのか、ということについて探究したい。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		NPO法人セブンスピリットで音楽教室の指導ボランティアを行う。そこには、スラムの貧困層から中流階級の子どもたちが通っている。セブンスピリットに通う子どもたちが、セブ島の大学に進学を希望する場合、学内オーケストラに所属することを条件に学費が免除される制度まである。まさしく、音楽で人生を変えられる場所だと言ってよいだろう。そこで私は、子どもたちと理事長にインタビュー調査をする。現在想定しているインタビュー内容は次の通りだ。 子どもたち: ・「音楽教室に通う前と後で変わったことは？」 ・「音楽をやっていてよかったと思う瞬間は？」 ・「あなたにとって音楽とは何？」 理事長: ・「セブンスピリットの活動をしてきて、印象に残っている瞬間は？」 ・「現在、目標の一つであった、子どもたちの未来を切り開く、ということが実現してきていると私は感じているが、理事長自身はどう考えているか？」 ・「セブの子どもたちの支援に、なぜ音楽を選んだのか？」 また、音楽教室でのボランティア活動で、子どもたちと一緒に合奏をする。私は、ピアノと打楽器を演奏できる。音楽を楽しんでいる者同士、音と音で感じるものがあると考える。セブンスピリットの子どもたちが、音楽に対してどう感じているのか、どう楽しんでいるのかを肌で感じたい。音楽を通した国際交流には、実際に演奏することが欠かせないと考える。さらに、実際にスラム地域を訪問してみたい。セブンスピリットでは、スタディツアーと題し、スラム地域の訪問、そこに住む人々へのインタビューができるツアーを開催している。実際にスラムを訪れることで、自分の目で現状を見ることができ、スラムについての理解が深まるだろう。スラムではどのような支援が望まれているのか知りたい。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	セブに、NPO法人セブンスピリットという団体があり、貧困層の子ども達に音楽教育をしていると知った。ボランティアさせていただけないか、メッセージを送り問い合わせをした	①留学前 （成果・結果）	ボランティア受け入れ許可を頂いた。 トビタテに応募できた。
	②留学中 （活動内容等）	NPO法人セブンスピリットで2週間のボランティアを実施。スタディツアーに参加し、スラムを見に行った。また、音楽教室に通う子どもたちの練習補助や、合奏で一緒に演奏した。	②留学中 （成果・結果）	実際にスラムを訪問することで、スラムの現状を見て、知れた。貧困とはどういうことか体感した。子どもたちと交流して、音楽を心から楽しむ様子を見ることができた。
	③留学後 （活動内容等）	・トビタテ高校全期同窓会に参加。 留学の成果をいろんな人と喋る。	③留学後 （成果・結果）	多様な経験をしてきた人と話し、頭が整理された。
(5)問いに対する答えと考察		「音楽が人を自由にする。」セブンスピリットの活動が認められて、学内のオーケストラに所属することを条件に、大学に4年間無償で通えるという制度ができた。現在、スラム出身の子で、この制度を使い、プロトランペッターになろうとしている子どもがいる。実際、私が現地でインタビューした、セブンスピリットに通う子どもは、「音楽は、寂しさや悲しさから自分を遠ざけてくれる。」と熱く語ってくれた。スラムで子どもを音楽教室に通わせている母親は、「音楽は一部の裕福な家庭でしかできないと思っていたが、スラムでもさせてあげられてとても嬉しい。」と語ってくれた。その子どもも、「音楽が本当に楽しい！」と言っていた。スラムに住む子どもは、音楽で人生の可能性が広がったのだ。音楽を奏でる子どもたちは、常に笑顔で、楽しそうだった。人生において、「音楽に出会う」ことが重要であると考える。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		子どもたちとの初対面で、話すより先に合奏に参加したこと。そのとき、私の演奏で子どもたちが盛り上がってくれた。「国境を超えて音楽でつながる」ことを、体感した。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		雨の日に、ボランティア先まで行くためのタクシーが捕まらないのが想定外だった。天気予報があまり当たらず、スコールのように急激に激しい雨が降る。また、雨の日は、交通渋滞が激しいと、現地に行って知った。余裕を持ったスケジュールを組んでおくとよい。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		音楽は世界どこでも共通言語となり、人生を変えうること。スラムの子どもたちは、音楽に出会わなかったら、一生貧しい生活だったかもしれない。日本においては、音楽は日常に浸透していて、普遍的に楽しまれている。だが、音楽を、楽器を演奏することで楽しんでいるのはまだ一部である。私は、この探究活動で、音楽の可能性を学んだ。地元金沢でも、セブンスピリットのような、子どもたちが音楽を気軽に楽しめるような場所を作りたい。音楽を心から楽しむことがカギとなるだろう。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	続・音楽は人生をどう変えるか～音楽教育の可能性を探る～		
	活動内容	今回の留学では、セブンスピリットに、ボランティアという形で約2週間だけの訪問だった。 大学生になり、インターンとして長期滞在することで、運営側の視点も知ることができる。 また、オーケストラプロジェクトにも参加したい。現地の子ども達と、さらに交流を深めたい		

No	2

(1)探究活動の問い		生成AIをどのようにして学習に取り入れることができるのか？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		2023年,高校2年生の夏に二か月間いったフィリピンの語学学校への留学がきっかけです。 当時,今でこそ有名なChatCPTがリリースされて半年ほどたった頃で,私は名前を知っている程度でした。 しかし,その学校の授業で文法を自動で修正してくれる生成AIが使われていたことで生成AIの可能性にとても興味を持ちました。(文法など細かい部分はAIに任せてもいいのではないかと考えた。)実際に自習学習でも生成AIを使うと,留学前はほぼ0に等しかった英語力が半年で英検二級合格を達成することができました。このことから私は生成AIを使った学習が今までと比べてかなり効果的に行えるのではないか,教育現場にも広まると教師も生徒もそれぞれ効率が高まるのではないかと考えました。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		生成AIをどのようにして学習に取り入れることができるのかという問いに対して、私は留学前にいくつかの仮説を立てていた。まず、生成AIは学習者一人ひとりのレベルや苦手分野に合わせて問題を作成したり解説を行ったりできるため、個別最適化された学習を実現できるのではないかと考えた。また、ChatGPTのような生成AIを活用することで、時間や場所を問わず質問ができる「AIチューター」として学習をサポートしてくれる存在になるのではないかとも考えた。さらに、英語学習においては、会話練習や英作文の添削などアウトプットの機会を増やすことができ、語学力向上にも効果的である可能性があると想定した。加えて、生成AIは比較的低コストで利用できるため、塾や家庭教師に通うことが難しい学生でも質の高い学習サポートを受けられるようになり、教育機会の格差を縮小する可能性もあるのではないかと考えた。これらの仮説をもとに、海外では生成AIが教育の中でどのように活用されているのかを実際に調べ、日本の学習環境にどのように応用できるのかを探りたいと考えていた。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 (活動内容等)	ChatGPTやQuillBotを使い、英作文の添削やトピック作成、会話練習などを行いながら、自分に合った学習方法を模索した。生成AIと教育に関する情報収集・仮説づくりを行った。海外の教育機関やAI研究機関(大学や研究所)の取り組みを調べ、カナダでどのようにAIが教育に活用されているのかを調査した。	①留学前 (成果・結果)	短期間で効率的に英語学習を進めることができ、英語力の向上を実感した。生成AIが個別最適化された学習ツールとして有効である可能性を実体験から感じた。 日本と海外ではAIの教育利用に差がある可能性があると考え、「海外の事例を知ることで日本の教育にも活かせるのではないか」という仮説を立てた。
	②留学中 (活動内容等)	はじめは,アンケートでも情報を集めようと考えていたのですが,統計を取ったところでそんな情報はありふれたもので私の探究テーマのなんの解決にもならないと,現地についてから気が付きました。そこからはトロント大学の学生や教員の方へのインタビューにシフトチェンジしようと考え,はじめに短い期間で大学内の生成AI学習システムにについて詳しい人物とつながるためのコネクションづくりを頑張りました。研究所にメールを送ったり,大学のオフィサーに教員を紹介してもらったりした結果,大学の生成AIシステムに詳しい教授にインタビューすることができました。	②留学中 (成果・結果)	実際にトロント大学では試験的に,授業に生成AIが取り入れられていることがわかりました。学生は大学が安全確認をし推奨された生成AIツールを利用し授業を受けます。しかしただ生成AIが出力した回答を丸写しするのではなく,生徒自身に情報が本当に整合性があるものなのか確認させ,清書は自分の言葉で書かせる。こうすることで思考力の低下防止,生成AIに対する批判的思考力,情報リテラシーを同時に培っていることがわかりました。この授業では生成AIが単なる効率化の道具でなく,思考を深めるツールとして使用されていました。 また,個人情報など重要度をレベル分けし,使用する生成AIによって入力する情報に制限をかけたり,大学のアカウントから生成AIツールにログインすることでデータが保護されたり,様々な工夫,対策が行われていました。 日本で生成AIを利用する際も線引きが何より大事だなと思います。その線を明確に引くためには,まずはガイドラインの制定や,生成AIツールの精査,発展がまだまだ必要だと感じますが,なにより生成AIの便利さ,必要性をもっと理解してもらうことだと思います。
	③留学後 (活動内容等)	地域コミュニティーで生成AIのワークショップを開催した。 生成AIの基本的な使い方や、学習に活用する方法を紹介するワークショップを実施した。さらに、教育に取り入れるには生成AIの重要さを世間に認知させるのが大事だと考え、今回エヴァンジェリスト活動として大学教授三名を含む五名の審査員、学生、教員の前で,生成AIの重要さと今回私が行った探究の成果,そしてトビタテ留学ジャパンの魅力を伝えるためにプレゼンテーションを行った。	③留学後 (成果・結果)	生成AIの教育的価値や学習への具体的な活用方法について理解を深めてもらうことができた。大学教授や学生、教員など多様な立場の参加者から質問や意見を得ることで、生成AIへの関心を高めるきっかけを作ることができた。また、自身の探究活動の成果やトビタテ留学JAPANの魅力を発信することで、生成AIを教育に取り入れる可能性や留学プログラムへの関心を広げることにつながった。
(5)問いに対する答えと考察		授業では生成AIが単なる効率化の道具でなく,思考を深めるツールとして使用されていました。 また,個人情報など重要度をレベル分けし,使用する生成AIによって入力する情報に制限をかけたり,大学のアカウントから生成AIツールにログインすることでデータが保護されたり,様々な工夫,対策が行われていました。日本で生成AIを利用する際も線引きが何より大事だなと思います。その線を明確に引くためには,まずはガイドラインの制定や,生成AIツールの精査,発展がまだまだ必要だと感じますがなにより生成AIの便利さ,必要性をもっと理解してもらうことが必要だと考えました。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		自分の探究テーマである「生成AIをどのように学習に取り入れることができるのか」という問いに対して、実際にAIを英語学習に活用した経験をもとに探究を進めることができた。また、留学中に学生や教育関係者から話を聞いたり、アンケート調査を行うことで、日本と海外の生成AIの活用状況を比較する視点を持てたことも成果の一つである。さらに、留学後にはプレゼンテーションやワークショップを通して探究の成果を発信し、生成AIの可能性を多くの人に伝えることができた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		一方で、調査対象の人数が限られていたため、より多くの学生や教育関係者からデータを集めることができれば、より客観的で説得力のある結果を得られたと感じている。また、生成AIの教育への活用について、具体的な授業実践の事例まで深く調べることが十分にできなかった点も課題として残った。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		今回の探究を通して,問いに対する答えを見つけるためには,自分から積極的に行動し,多様な意見やデータを集めることが重要であると学んだ。今後は今回の課題を踏まえ,より多くの人に調査を行いながら,生成AIの教育活用についてさらに深く探究していきたい。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	生成AIを実際の学習環境の中でどのように活用すれば効果的なのか		
	活動内容	今回の探究活動を通して,生成AIが学習を支援するツールとして大きな可能性を持っていることを実感した。一方で,日本ではまだ教育現場での活用が十分に進んでいないことも課題として感じた。そこで次の探究活動では,生成AIを実際の学習環境の中でどのように活用すれば効果的なのかをより具体的に調べたいと考えている。例えば,学生が生成AIを使った場合と使わなかった場合で学習理解度や学習効率にどのような違いが生まれるのかを比較するなど,より実践的な方法で検証していきたい。また,今回行ったワークショップの経験も活かしながら,教育現場で生成AIを安全かつ効果的に活用する方法について発信していきたい。		

No	3

(1)探究活動の問い		インドネシアの水質汚染問題に対し、珪藻土を使った濾過技術は、どのように持続可能な解決策として機能するか？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		インドネシアでは排水インフラが整っておらず、急速な産業発展により、家庭や産業から排出される有機性汚染物質が地表水に高濃度で存在しています。また、日本と同様に島国で地震が多発する地域であるため、インドネシアで得た知見は災害時における日本の水問題にも応用可能であると考えられます。 珪藻土を用いた濾過技術が現地の水質改善にどれほど有効であるかを検証し、持続可能な解決策を提案するとともに、環境教育を通じて地域住民の意識向上にもつなげたいと考えています。この探究を通じて、インドネシアと日本に共通する課題に対し実践的な解決策を提供し、持続可能な社会の実現に貢献します。特に、SDGsの6番目の目標である「安全な水とトイレを世界中に」の達成に向けた一助となることを目指します。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		日本と同様にニセタルケイソウが濾過性能を高める		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	日本で珪藻土を用いたろ過研究を行い、吸着性能やろ過効果の基礎データを取得した。	①留学前 （成果・結果）	研究の基礎データを整理し、海外での比較実験の準備を行った。
	②留学中 （活動内容等）	BRINで環境水のサンプリングと珪藻土ろ過実験を実施。また孤児院で交流活動を行い、学習意欲のきっかけについてインタビューを行った。	②留学中 （成果・結果）	ろ過実験では日本と同様の傾向を確認できた。孤児院では、交流が学習意欲のきっかけになった事例を知ることができた。
	③留学後 （活動内容等）	研究成果の整理と発表準備を行い、学校や研究発表会で共有する。	③留学後 （成果・結果）	研究と教育の両面から留学経験をまとめることができた。
(5)問いに対する答えと考察		学習意欲は単に教育環境や物資によって生まれるものではなく、人との交流や対話の中で生まれることが多いと感じた。孤児院の子どもが、日本人大学生との交流をきっかけに勉強に興味を持ったという話から、人と人との関係が学びの原点になると考えた。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		研究機関での科学研究と教育現場での交流活動の両方を経験し、多角的に学びを考えることができた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		研究期間が短く、十分な実験データを収集することが難しかった。今後は長期的な研究計画が必要である。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		研究は社会や人とのつながりの中で意味を持つものであり、科学と教育は密接に関係していると実感した。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	人との交流が学習意欲を生むプロセスはどのようなものか。		
	活動内容	教育学の視点から学習意欲の形成について研究し、科学教育や国際交流を通した学びの可能性を探究する。		

No	4

(1)探究活動の問い		日本とオーストラリアのテニスの指導方法の違いとは？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		私大好きなテニスを日本から出て世界で探究することへの強い好奇心		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		オーストラリアの中でもテニスアカデミーによって指導方法は異なると思うが、日本と比べると自由で楽しく選手の個性をいかす、選手に合ったコーチで行うプライベートレッスンが中心だと考える。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 (活動内容等)	自分の学校の部活の現状を知るために、部員にインタビューを行った。事前にオーストラリアの気候やテニス人口など調べておいた。留学中に困らない程度の英語力もある程度付けておいた。留学中に必要な持ち物を調べたことをもとに準備した。自分は飛行機乗り継ぎで行ったため、行き方の確認も行った。	①留学前 (成果・結果)	自分の部活には外部のコーチが来てくださっているから、そのことについて部員に聞くと正直に自分の意見をコーチに言えない人が多かった。オーストラリアのゴールドコーストは8月でも昼間なら半袖で過ごすことができると知った。英語力はあまり付けることができなかった。持ち物は事前に色々調べて必要なものをリストアップして準備できた。乗り継ぎも母と何度も確認を行なった。
	②留学中 (活動内容等)	KDV SPORTというアカデミーに通い、実際にレッスンに参加する。コーチや選手にインタビューを行う。写真や動画を撮る。日本とどのように違うのかをよく見る。SNSで発信する。	②留学中 (成果・結果)	月～金曜日、グループレッスンとトレーニングを中心に行い、2週間のうち1日だけプレイベートレッスンも行った。男女や年齢、レベル関係なくみんな一緒に打ち合っていた。トレーニングの様子や実際の自分が打っているところなどを撮影した。インタビューをしたことで、コーチと選手がお互いに尊敬しあっている良い関係だと知れた。
	③留学後 (活動内容等)	留学での経験を部活の部員や先生に話す。アカデミーで行ったトレーニングや練習方法を実際に取り入れる。トビタテを周りの人に広める。	③留学後 (成果・結果)	留学に興味を持ってくれた部員がいた。アカデミーで行ったことを全て取り入れることはできていないが、トレーニングはすぐに実行することができた。留学では、毎日1時間のトレーニングの時間があったから、そこが自分たちの部活との大きな差の一つだと分かった。
(5)問いに対する答えと考察		日本とオーストラリアはそれぞれに良さがあるが、オーストラリアは自由でコーチと選手の尊敬し合う関係が日本にはない。指導方法としては、日本では男子と女子、レベルや年齢で分けていることが多いが、オーストラリアはそんなことは関係なくみんな一緒に練習をしていた。他にも、選手にあったコーチでレッスンができ、選手に意見を求める場面が多かった。つまりオーストラリアのテニスの指導方法は、自由な環境の中で、コーチと選手が良い関係を築き、年齢などに関係なく一緒にプレーしながら自分で考える力を伸ばす指導だ。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		自分が思っていたよりも英語が通じたし、コミュニケーションをとることができた。日本の文化の良さを現地の人にうまく伝えることができた。アカデミーでは自分から質問や挨拶をすることができた。自分より強い相手にも負けずに打ち返すことができた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		はじめの方は、初めてのことばかりでアカデミーでもあまり友達ができず一人だったことがあった。その要因としては、自分から積極的に話かけなかったからだ。だから、怖がらずに挑戦していくことが大切だ。コーチや選手のアポをうまくとることができなく、インタビューがうまくいかないことが多かった。今後は、相手のことをよく考えて行動していく。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		テニスは、スキルを磨くためには日々のトレーニングの積み重ねが自分を大きく変えるのだということ、自分よりも強い人や試合などをもっとして経験を積んでいくことなどが重要だと学んだ。テニス以外では、自分がから積極的にいろんなことに挑戦することの大切さや世界共通で挨拶は本当に大事だということや、英語が上手ではなくても伝えようとすることや互いの思いやりや信頼が大切だということを学んだ。今後は、さらにいろんなテニスの大会に出場したり、留学で行ったトレーニングを毎日繰り返していきたい。テニスだけでなく、英検など英語の面でも挑戦していきたい。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	世界で活躍するスポーツトレーナーはどのように自分の個性を活かしているのか		
	活動内容	今回の探究により、さらに自分の将来の夢であるスポーツトレーナーに興味を持つことができたため、日本だけでなく世界のスポーツトレーナーについて実際に見にいき、インタビューなどの調査を行う。		

No	5			
(1)探究活動の問い		世界で戦える人材を育てる”競泳環境”の本質に迫りたい		
(2)探究活動の背景・動機・目的		15歳の時に怪我をして泳ぐことができない初めての挫折を経験しました。「ただ泳ぐ」だけでなく「自分を見つめ直し考え、行動する力」を育てたいと思うようになりました。トビタテのテーマでもある「自分の学びと挑戦を社会に還元する」という言葉に強く共感し、自分の経験を活かせる探究活動に決めました。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		留学前は、オーストラリアの選手が世界で活躍できる理由は「練習量や施設環境の充実」にあると考えていました。日本よりも恵まれた環境で毎日多くの時間を練習し、高いレベルの選手と切磋琢磨できることが強さにつながっていると思っていました。また、指導方法も科学的で、個人の自主性を尊重するトレーニングが行われているのではないかと想定していました。こうした点を現地で確かめ、自分の競泳や練習への向き合い方を見直すことを目的としていました。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	オーストラリアの競泳環境について文献や動画を通して調べ、日本との違いを整理しました。また、英語で質問できるようにインタビュー内容を事前に準備し、語学力向上のために毎日オンライン英会話を行いました。	①留学前 （成果・結果）	英語で質問や意見を準備する練習を通して、自分の考えを言葉で伝える力が少しずつ身についた。また、留学に向けて計画的に学習や準備を進める姿勢が養われ、自立的に行動する力が高まった。
	②留学中 （活動内容等）	メルボルンのトップクラブで現地選手と共に朝練・夜練に参加し、実際の練習方法や雰囲気を体感しました。さらに、コーチにインタビューを行い、「楽しむこと」「テーマを持って練習する」「自主性を大切にする」ことが強さにつながっていると学びました。オーストラリア短水路選手権では200IMで決勝に進出し、現地オリンピアンと同じ舞台で泳ぐ経験を得ました。	②留学中 （成果・結果）	現地のトップ選手たちと練習を共にする中で、競泳に対する考え方の違いを肌で感じた。特に「練習を楽しむ」「自分で考えて行動する」という姿勢が強さにつながっていることを理解できた。英語でのコミュニケーションにも慣れ、日常会話がスムーズにできるようになった。
	③留学後 （活動内容等）	帰国後は学んだ考え方を生かし、練習ごとにテーマを決めて取り組むようになりました。また、チーム内で積極的に声をかけ合い、仲間と切磋琢磨する雰囲気づくりに努めています。探究の成果をプレゼンや報告書で共有し、世界に挑戦できるというメッセージを後輩に伝えています。	③留学後 （成果・結果）	留学で学んだ考え方を日本での練習に取り入れ、1回1回の練習の目的を意識できるようになった。仲間との関わり方も前向きになり、チーム全体の雰囲気づくりにも貢献できた。さらに、英語学習への意欲が高まり、IELTS6.5を目指して継続的に取り組んでいる。
(5)問いに対する答えと考察		オーストラリアの競泳選手が世界で活躍できるのは、「楽しみながら主体的に取り組む文化」と「考えて行動する習慣」が根付いているからだと分かった。日本では練習量や努力が重視される傾向がある一方、オーストラリアでは“なぜこの練習をするのか”を自分で考え、1回1回の練習に意味を持たせている。さらに、コーチと選手の信頼関係が強く、選手が自分の意見を発信しやすい環境が整っている。この違いこそが、世界で戦える選手を育てる要因だと感じた。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		最初は英語での会話に不安があったが、勇気を出して積極的に話しかけることで、現地の選手やコーチと信頼関係を築くことができた。また、練習ではテーマを持って取り組む姿勢を大切にし、限られた期間でも自分の課題を意識して改善できた。さらに、オーストラリア短水路選手権では200IMで決勝に進出し、現地のオリンピアンと同じ舞台で泳ぐという目標を達成できた。この経験を通して、自分の努力が世界でも通用するという自信を得た。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		最初の数日は英語で思うようにコミュニケーションが取れず、質問したいことをうまく伝えられなかった。また、現地の練習メニューやテンポの速さに戸惑い、ついていくのに精一杯で自分の泳ぎを見直す余裕がなかった。要因は、事前のリスニング練習と専門用語の準備不足にあったと感じている。今後は、英語での専門用語や表現を日常的に学び、相手に自分の意図を的確に伝える力を高めたい。また、練習中も状況を俯瞰して考える余裕を持つことを意識していく。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		今回の探究活動を通して、強くなるためには「量より質」や、「やらされる練習」ではなく自分で考えて行動する姿勢が大切だと学んだ。また、楽しみながら挑戦することが、継続力や成長につながると実感した。英語でも競泳でも、失敗を恐れずに一歩踏み出すことの大切さを学び、挑戦する勇気が自分を大きく成長させることを確信した。今後はこの経験を生かし、自ら課題を見つけて行動できる選手・人間を目指したい。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	日本と海外の指導スタイルの違いが選手のモチベーションや成長に与える影響		
	活動内容	次の探究活動では、日本と海外の競泳指導の違いをより深く理解するため、国内外のコーチや選手にオンラインでインタビューを行い、練習内容・声かけ・メンタル面のサポート方法などを比較・分析する。また、自分のチームでも「自主的に考える練習」を実践し、効果を記録・検証する。さらに、英語でトレーニング日誌を作成し、海外の選手とも意見交換を行うことで、世界基準の練習法を学びながら英語力向上も目指す。		

No	6

(1)探究活動の問い		どうすれば、日本でも多世代交流も含めて、プレイパークを「地域の日常に根差した居場所」として継続的に機能させる仕組みを作れるのか。そのために、フィンランドの制度や支援体制から学べることは何か		
(2)探究活動の背景・動機・目的		私は、石川県でのプレイパーク運営を通して、地域の子どもの居場所づくりを目指しています。公的支援が乏しい日本の現状を踏まえ、公的支援が進むフィンランドで、制度と現場の様子を見て学び、石川県での推進に生かしたいと考えました。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		日本のプレイパークが地域に根づきにくい要因は、活動が「特別なイベント」や「一部の人の善意」に依存している点にあると考えた。フィンランドでは、プレイパークやユースセンターが公的制度の一部として位置づけられ、年齢ごとに役割が整理されているため、日常的に利用されやすい。そのため、日本でも制度的な支援や役割分担を明確にし、地域の大人や若者が自然に関われる仕組みを整えることで、プレイパークは継続的な居場所として機能するのではないかと仮説を立てた。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 (活動内容等)	①事前課題＆事前研修(石川・東京) ②フィンランドの歴史、自分が調べたい制度等の調査(文献・インタビュー) ③「フィンランドGTP」での授業準備 ④英語(フィンランド語)学習(週1英会話・独学)	①留学前 (成果・結果)	事前研修では、他の参加者の探究を聞くことで、自分の関心が個人の体験にとどまらず、地域や制度の視点へと広がり、探究を続ける意欲が高まった。 また、自分の問いを人に説明する機会を通して、プレイパークについて何を知りたいのか、どこをフィンランドで確かめたいのかを具体的に整理することができた。授業準備や英語学習では、探究内容を簡潔に言語化する練習を重ね、現地で施設の人や子どもたちに質問し、対話を行うための基礎的な表現力を身につけた。
	②留学中 (活動内容等)	①「フィンランドGTP」プログラムへの参加 フィンランドの公立学校や図書館、ユースセンターの視察や小学校での授業実践を行う。 ②現地のプレイパーク、ユースセンターでの活動 フィンランドでは、小学生まではプレイパーク、それ以上の若者はユースセンターを利用する。その二つの施設でボランティア活動を行い、そこで、設備、活動内容、利用状況、プレイリーダーやユースワーカーの働き、運営方法、利用者の様子について調査をする。 また、留学前に調査した日本(主に石川県)のプレイパークの現状に、フィンランドではどのようにアプローチしているのかを調査する。 ③その他調査活動 ホームステイ先の地域住民に、プレイパークが地域の中で果たす役割についてインタビューを行う。	②留学中 (成果・結果)	フィンランドでは、プレイパークとユースセンターが年齢によって明確に分けられ、それぞれが日常的な居場所として機能していることを実感した。特に、職員が「管理者」ではなく「見守る存在」として関わっている点や、施設が地域の生活動線の中に自然に組み込まれている点が印象的だった。また、地域住民へのインタビューを通して、プレイパークが特別な場所ではなく「当たり前にあるもの」として認識されていることが分かり、日本との意識の違いを具体的に捉えることができた。
	③留学後 (活動内容等)	留学の振り返りを行い、フィンランドで見たプレイパークやユースセンターの特徴を日本の事例と比較しながら整理した。また、現地で得た気づきをもとに、今後日本でどのような形でプレイパークの認知拡大や支援につなげられるかを検討している。	③留学後 (成果・結果)	留学を通して、「制度」だけでなく「日常の中でどう存在しているか」という視点の重要性に気づいた。今後は、実際のプレイパークへの関わりや発信活動を通して、地域の人にとって身近な居場所としての在り方を探究していきたいと考えている。
(5)問いに対する答えと考察		日本でプレイパークを「地域の日常に根差した居場所」として継続させるためには、個人やボランティアの努力に依存するのではなく、行政の制度や予算の中に位置づけることが不可欠であると考える。 フィンランドでは、遊びや居場所が教育・福祉の一部として認識され、専門職の配置や安定した資金によって支えられていた。また、年齢ごとに役割の異なる居場所が用意されており、子どもが成長しても地域とのつながりが途切れにくい構造があった。日本でも、プレイパークを一過性のイベントではなく、地域政策の一部として捉え直し、他の居場所や支援制度と連携させることが重要である。 フィンランドでプレイパークやユースセンターを実際に訪れ、制度だけでなく現場の運営や雰囲気を観察したことで、「居場所」が成り立つ背景には、制度単体ではなく日常に組み込まれた仕組みと人の関わりがあることを実感した。特に、プレイパークは単なる自由遊びの場ではなく、学童的な役割や子育て支援の一部として位置づけられており、行政予算や専門職によって安定的に運営されていた。一方で、ユースセンターは外遊びの延長ではなく、年齢に応じた居場所として役割が明確に分かれていた。このことから、日本で同じ形をそのまま導入するのではなく、地域の文化や既存制度に合わせた再構築が必要だと考えた		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		フィンランドのプレイパークやユースセンターを視察するとともに、現地の高校生へのアンケートやディスカッションを実施できた点である。これにより、日本で行ったプレイパークのボランティアや高校生アンケートと比較しながら、交流の場や制度の違いを具体的に整理することができた。また現地で得た気づきをもとに、探究の問を再定義し、居場所の成立条件という視点に発展させることができた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		当初は、フィンランドでのボランティアや現場見学を通して、制度の仕組みを具体的に学べると想定していた。しかし実際には、短期間の滞在や言語の壁もあり、制度の詳細まで深く理解することは難しかった。 また、ユースセンターは外遊びの延長というよりも若者のための室内型の居場所であり、プレイパークも自由な遊び場というより学童的な性格が強く、想像していたものとは異なっていた。このギャップは、事前に文献や理念から受け取ったイメージと、現場の実態との差によるものだと考える。一方で、その違いに気づくまでは改善が難しいので、ギャップに気づけたこと自体が重要だったと捉えたい。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		今回の探究を通して、交流の場は特定の形をそのまま導入することで成立するものではなく、日常性・自由度・身近さといった条件の組み合わせによって成立する可能性があると学んだ。また、海外事例を参考にする際には、制度や文化の違いを踏まえて考えことの重要性を実感した。今後は整理した事例をもとに日本の居場所を再分析し、実践につなげていくことが課題である。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	地域の人々は、どのような関わり方や意味づけを通して、プレイパークや子どもの居場所を“特別な支援”ではなく“日常の一部”として受け入れているのか		
	活動内容	今回の探究留学を通して、プレイパークやユースセンターが制度として支えられている背景を十分に理解することは難しかった一方で、「居場所が日常として地域に存在すること」の重要性を強く実感した。そこで次は、制度そのものよりも、居場所が地域の中でどのように受け取られ、使われ、続いているのかに焦点を当てて探究したいと考えている。居場所が成立する条件についても整理できたので、大学で自分の探究分野に関する学びを得たうえでその仮説も確かめて一歩進んだ学びを得たい。		

No	7			
(1)探究活動の問い		スマートシティ導入や能登復興について、私たちが発信し伝えていくべきことは何か？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		能登の「過疎化」「若者の流出」「復興の遅れ」といった現状を知り、地域の未来づくりに自分たちがどのように関われるのかを考えたいと思ったことが、本探究活動の動機である。能登を「住みたい場所」に変えるためには、スマートシティのような新しい技術や発想を取り入れることが一つの可能性になるのではないかと考えた。また、留学を通して世界の技術や暮らしを実際に見た経験から、理想論ではなく、私たちにできる現実的な第一歩は何かを探したいと強く思うようになった。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		留学前は、能登の過疎化や若者流出、復興の遅れといった課題に対して、スマートシティのような先端技術を導入することで、地域の利便性が向上し、人が集まりやすい環境をつくることができるのではないかと考えていた。特に、交通や生活インフラにIT技術を取り入れることで、高齢者や若い世代の暮らしやすさが改善され、結果として地域の活性化につながるのではないかという仮説を立てていた。また、海外で実際に使われている先進的な技術や仕組みを学び、それを能登に応用することで、復興の新しい形を提示できるのではないかと想定していた。留学前は、技術を導入すること自体が課題解決の大きな鍵になると考えており、先進事例を参考にすれば比較的そのまま活用できる部分も多いのではないかと考えていた。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 (活動内容等)	留学前には、日本国内で三つの企業・団体・行政機関を訪問し、能登復興に関する情報収集を行った。奥能登で活動する「合同会社CとH」の施設「OKNO to Bridge」では、第一次産業とITを組み合わせた新しい働き方や、地域と都市部をつなぐ取組について話を伺い、能登では林業や農業とITの融合に需要があることを学んだ。また、「国土交通省 能登復興事務所」では、国が進めている復興の現状や課題、実際に行われている技術的な取組について具体的に説明していただいた。さらに石川県庁および県議会議員の方からは、県と国で異なる役割分担や復興施策について話を伺い、デジタルインフラの整備が今後ますます重要であることを理解した。	①留学前 (成果・結果)	これらの活動を通して、能登復興は一つの立場だけで進められているのではなく、企業・国・県など多くの主体がそれぞれの役割を持って取り組んでいることを理解した。また、復興には技術だけでなく、地域の特性や人々の暮らしを踏まえた視点が重要であると気づいた。さらに、能登のために活動している人たちから直接話を伺うことで、能登の現状を改めて深く受け止めるようになり、自分自身がこの復興に対して何ができるのかを、これまで以上に強く考えるようになった。これにより、留学中に海外の事例と比較しながら学ぶ目的や視点を明確にすることができた。
	②留学中 (活動内容等)	留学中は、アメリカの都市で実際にスマートシティに関連する技術や都市環境を体験し、現地の企業・団体への訪問を通して情報収集を行った。サンフランシスコでは、自動運転配車サー ビス「Waymo」を実際に利用し、最新技術が日常生活の中でどのように活用されているのかを体感した。また、トレインターミナルの屋上に整備された公共空間「セールスフォースパーク」を訪れ、都市部における自然や公共空間の役割について学んだ。サンノゼでは、PFU America, B-Bridge International, STSInnovation の三社を訪問し、IT技術と人々の生活との関係や、地域性に配慮した技術活用の考え方について話を伺った。企業ごとに異なる視点から意見を聞くことで、技術導入には多様な考え方があることを理解した。さらにロサンゼルスでは、大規模火災の被災跡地を見学し、World Visionの職員の方から災害支援や減災の取組について直接話を聞いた。	②留学中 (成果・結果)	留学中の体験を通して、スマートシティや復興は先端技術を導入すること自体が目的ではなく、人々の生活や地域の特性に寄り添うことが重要であると実感した。技術は利便性を高めるためだけでなく、誰のために使われ、どのような暮らしを支えるのかを考えた上で活用されるべきだと学んだ。また、現地での出会いや体験から、困難な状況にある人々は能登だけでなく世界中に存在していることを強く意識するようになり、復興や支援を一地域の課題としてではなく、国や地域を越えた共通の課題として捉える視野を持つことができた。これらの学びを通して、今後は自分自身がどの立場で、どのように社会や地域に関わっていくのかを主体的に考えるようになった。
	③留学後 (活動内容等)	留学後は、今回の留学で得た経験や学びを整理し、WebサイトやSNSを通じて発信することで、能登復興に関わっていきたいと考えている。そのために、留学中に得た気づきや現地で見聞きした事例を振り返り、どのような情報を、誰に向けて発信するのが効果的かを検討している。また、海外のスマートシティ事例や復興支援の取り組みと、能登の現状を比較しながら調査を行い、発信内容に説得力を持たせるための情報収集や構成づくりを進めている。	③留学後 (成果・結果)	これらの活動を通して、留学で得た学びを自分の中に留めるのではなく、社会に共有する形で活かす姿勢が身につくと考えている。また、WebサイトやSNSでの発信を行うことで、能登復興について考えるきっかけを多くの人に提供し、地域と都市、国内と海外をつなぐ役割を果たしたい。さらに、情報を整理し発信する過程を通じて、自身の考えを言語化する力や、多様な立場の人に配慮した伝え方を身につけ、今後の探究活動や将来の進路にもつなげていきたい。
(5)問いに対する答えと考察		本探究を通して、私たちが発信し、伝えていくべきことは、単に「能登の現状」だけではなく、「能登の魅力」や「そこに暮らす人々の思い」、そして「地域に合った復興の形」であるという結論に至った。探究当初は、スマートシティのような最新技術を導入することで、過疎化や若者流出、復興の遅れといった地域課題の多くが解決できるのではないかと考えていた。しかし、留学中にアメリカの都市や企業、被災地支援団体を訪問する中で、技術はあくまで人の生活を支えるための「手段」であり、それ自体が目的ではないことを強く実感した。特に印象に残ったのは、どの地域でも技術が住民の価値観や文化、暮らし方に寄り添う形で使われていた点である。世界には能登以外にも困難な状況にある地域が多く存在し、それぞれが異なる背景のもとで独自の方法で課題に向き合っていた。そうした事例を知る中で、外部の成功事例をそのまま能登に当てはめるのではなく、能登の人々の声を中心に据えた復興のあり方を考える必要があると感じるようになった。高齢化が進む能登においては、利便性や効率性だけを重視した技術導入ではなく、分かりやすさや安心感、地域らしさを守る視点が特に重要である。そのため、私たちができる第一歩として、WebサイトやSNSを通じて、能登の課題だけでなく魅力や人の思い、学んだことや感じたことを発信していくことが、復興への関心を広げるきっかけになると考えている。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		活動を通して上手くできたことは、留学先で見聞きしたことをそのまま受け取るのではなく、能登の状況と照らし合わせながら考え直せた点である。アメリカの都市や企業、支援団体を訪問する中で、最新技術や先進的な取組だけに注目するのではなく、「なぜその地域でその方法が選ばれているのか」「誰のための仕組みなのか」を意識して話を聞くことができた。 また、取材や交流を通して、多様な価値観や復興の考え方に触れられたことも大きな成果である。技術は万能ではなく、人の思いや地域性と結びついて初めて意味を持つという視点を得られたことで、当初考えていたスマートシティ像を見直すきっかけになった。 さらに、グループでの活動を通じて、自分の考えを言語化し、他者と共有しながら探究を進められた点も成功だったと考えている。意見の違いを踏まえつつ議論を重ねたことで、探究の方向性を修正し、より現実的で地域に寄り添った視点に近づくことができた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		活動を進める中で上手くできなかったことは、探究のゴールや問いを途中で見失ってしまった点である。取材や企業訪問を重ねる中で多くの情報を得ることができた一方で、何を明らかにしたいのか、最終的にどのような形で能登に還元したいのかが曖昧になり、自分たちは何もできないのではないかと感じてしまう場面があった。その要因として、事前に立てた問いや仮説を活動の途中で十分に見直せていなかったことが挙げられる。また、得られた情報を整理しきれないまま次の活動に進んでしまい、目的と手段の関係が分からなくなっていたことも影響していたと考えている。改善点としては、活動の節目ごとに情報を整理し、「今の活動は問いにどうつながっているのか」を確認する時間を設けるべきだったと考えている。また、質問内容や探究の視点を状況に応じて柔軟に見直し、ゴールを再設定することで、より主体的に探究を進めることができたと感じている。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		今回の探究活動を通して得た最も大きな学びは、技術や新しい仕組みは目的ではなく、「人の生活を支えるための手段」であるという視点である。留学前は、スマートシティのような先進技術を導入することで地域課題が解決できるのではないかと考えていた。しかし、実際に海外の企業や現地で活動する人々の話を聞く中で、地域の文化や人の思いを無視した技術導入は、かえって地域らしさを失わせてしまう可能性があることに気づいた。また、探究活動では「何を知りたいのか」「何を明らかにしたいのか」という問いを持ち続けることの重要性を学んだ。情報を集めること自体が目的になってしまうと、活動の方向性を見失ってしまう。常に問いに立ち返り、目的と行動を結びつけながら進めることが、探究を深める上で欠かせない教訓であると感じている。今後は、地域や社会の課題に向き合う際、外部の成功事例や技術をそのまま当てはめるのではなく、その土地で暮らす人の声を最優先に考えたい。また、自分が得た学びや気づきを発信する際も、「何を伝えるべきか」「誰に届けたいのか」を意識しながら行動していきたいと考えている。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	地域の人の思いや暮らしに寄り添いながら、電子情報工学の知識や技術をどのように活かせば、地域にとって本当に役立つ仕組みをつくることができるのか。		
	活動内容	今回の探究活動では、スマートシティの導入そのものではなく、「誰のための技術なのか」という視点が重要であることを学んだ。次の探究活動では、地域の課題や人の声を起点として、身近で小さな技術活用の可能性を探っていきたい。 具体的には、能登の復興や地域課題に関する情報が、どのような形で発信され、どの層に届いているのかを調べるとともに、高齢者や若い世代にも伝わりやすい情報の形について検討する。また、電子情報工学科で学んだプログラミングやシステム設計の知識を活かし、実際に簡単なWebページや仕組みを試作するなど、技術を「人の生活に近い形」で活用することを目指す。 この探究を通して、地域に寄り添った技術のあり方を具体的に考え、自分にできる第一歩を実践的に探っていきたい。		

No	8

(1)探究活動の問い		伝統文化「獅子頭」で栄える石川県を実現するには？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		昔から地元にある馴染み深い大好きな獅子舞が全国的に姿を消していっている状況をインターネットから知り、地元の誇りである獅子舞がなくなるのを食い止めたいと考えた。獅子舞を研究されている方や町長にお話を伺い、「少子高齢化」、「祭りに対する閉塞的な考え方」、「材料の高騰化」などが獅子舞を減少させている要因だと分かった。そこで、今の時代にあう伝統の残し方を学ぶことで、新しいお祭りの形として獅子舞が受け継がれる方法を考えることにした。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		オーストラリアは多民族国家のため、他の地域の方にも「お祭り」に馴染んでもらうために、さまざまな情報提供や実施するためのイベントの開催がされているのではないか。文化が異なるとしても、互いに関心を持ち歩み寄る意識が国民の中に風土としてあるのではないかと考えた。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	関係者へのインタビュー ・獅子舞を長年している、研究されている方 ・町長 ・獅子舞をしている地元の青年団の団長 （獅子舞をする側の立場からの意見） ・加賀温泉駅で働いている観光物産関係の方 （獅子舞で魅力を発信しようと試みていることについて伺った）	①留学前 （成果・結果）	・獅子舞が全国的に少なくなっていていること ・獅子舞をする人たちからの不満 ・異なる地域から参加する人に対しての偏見 ・現在獅子舞を継承しようと行っている取組 ・その他解決しなければならない問題　など それぞれの立場や視点から多くの情報や意見を頂くことができた。
	②留学中 （活動内容等）	関係者へのインタビュー ・パース市役所のお祭りの企画運営を行っている方 ・語学学校に通っている友達やホストファミリー ・市内の図書館の司書さん （国民の価値観やお祭りに対してどう考えているか） ・先住民族の展示がされている博物館の職員 （みんなに愛され続けられる展示方法や工夫） ・日本の文化を広めている団体Perth Japan Festivalの職員 （異文化の地で受け入れられる理由）	②留学中 （成果・結果）	昔から植民地としてイギリスの人たちが出入りしていたオーストラリアでは、たくさんの人種がいる生活に慣れており、多文化を受け入れる傾向があることがわかった。そのため、他の地域のお祭り文化にも興味をもって歩み寄ることができ、開放的なお祭り運営ができていることがわかった。 展示方法では、映像や実際の先住民族の声、美術作品、使っていた道具など五感を使って楽しむことができる工夫がされていた。お祭りの特定の時期しか触れることができない日本の獅子と違って、いつでも触れることができる環境づくりが人々を魅了する工夫なのではないかと考えた。 日本から飛び出して外国との交流するなど多文化とのつながりが大切だとわかった。
	③留学後 （活動内容等）	Perth Japan Festivalの運営者の方に、現地で行っているお祭りの動画を送っていただき、運営方法や人々に興味を持たせるための工夫について伺った。	③留学後 （成果・結果）	太鼓、盆踊り、獅子舞、舞妓、剣術などたくさんの日本のお祭り文化を披露していることがわかった。 お祭りの前になると、日本料理のレストランに張り紙でお知らせしたり、みんなの集まる公園で練習を行ったりして、人々に見てもらえる環境づくりを徹底して行っていることがわかった。
(5)問いに対する答えと考察		・海外の遠い地域とのお祭り文化交流を設ける ・お祭り時以外にも五感を使ったり、体験を通した獅子舞に触れることができる環境をつくる ・お祭り前に関係したイベントを運営すること（他の地域の文化を紹介する・獅子舞文化に詳しく触れる機会をつくる）など 日頃から見えるところで活動することなどが時代にあった伝統継承方法のひとつであると考えられる。これによって、日本のお祭りももっと開放的に他の地域から人々を呼び込むことができ、地域の魅力になると考える。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		文法や語法などを気にせず、とにかく話してみることを大切にして積極的に会話にチャレンジすることができた。 運営する側、制作する側、視聴する側などなどさまざまな視点から物事を考えて、自主的に行動することができた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		1対1の英語でインタビューしようとした時、咄嗟に言葉が出てこなくてそっけない態度になってしまうことが多かったこと。自分の伝えたいことに当てはまる英単語が思い出せなくて、何も言えない時間があってとても反省した。 自分が相手に何をして欲しいのか恥ずかしがって遠回しに伝えてしまうことが多く、結局何が言いたいのか聞き直されることが多かった。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		「習うよりまず慣れろ」の気持ちで英語を発してみることが大切ということや、失敗を恐れていたらいつまで経っても成長しないことを学んだ。 また、探究活動においては、今まで日本の中で獅子舞の魅力を広めるために何ができるかを考えていたが、日本と外国の交流という手段もあることに気づかされた。現実的なことからあまりこのアイデアを考えなかったが、実現の可否を考えるよりもどうすればできるかを考えることの大切さを学んだ。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	人々から愛される獅子舞とは。		
	活動内容	事後研修の時に同じチームになった友達が、ベトナムやインドネシアのお祭りは獅子舞があって、毎年多くの人々や観光客が見に来るという話を聞いた。日本と似ている獅子舞なのに人気や需要度にこれだけ差があるのは何故か気になった。 また、留学中にできた中国の友達も、中国の獅子舞は毎年たくさんの見学者が訪れることを教えてもらった。獅子舞に対する考え方の違いを日本と比較してみたいと思う。実際にお祭りを見学して、さまざまな年代層を楽しませる工夫や情報の共有方法などを調べてみたい。		

No	9

(1)探究活動の問い		海外観光客数を増やすために、能登の伝統工芸の魅力を効果的に発信するには？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		父が去年の能登半島地震のボランティアとして訪れたときの惨状を写真や現地の人達の話している動画を使って話してくれました。テレビで観ているのと実際に話を聞くのとでは感じ方が全く違っていました。実際に話を聞いて能登のために何か協力したい、様々な人に現状を知ってもらいたい、と強く感じました。だからこそ自分の言葉で、能登半島地震によって継続が困難に陥っている伝統工芸の魅力を伝えて復興への手助けをしたいと思いこの問いを設定しました。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		予想 ・草木染めは知られていない ・金箔は知られている ・地震が起きたことは少しは知っている ・地震の対策や取り組みは日本の方が進んでいる ・日本の取り組みはあまり知られていない		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 (活動内容等)	(1)草木染め 体験してもらうために実際に自分で調べて、作った。 (2)非常食 留学先で試食してもらう非常食を調べたり、実際に自分で食べてみて、選んだ。 (3)能登のボランティア 実際に能登に行き、ボランティアに参加した。	①留学前 (成果・結果)	(1)あまり色が残らず、苦戦した。煮る時間を増やしたら色が濃くなった。輪ゴムや、箸で模様をつけたりもした。 (2)日本には本当にたくさんの種類の非常食があってすごく驚た。私が食べた物はごく一部だがその中でも日本らしさが残る白米やおにぎりを持っていくことにした。 (3)能登半島地震から一年以上も経っているのに、未だに悲惨な状況が続いていることに驚いた。復興が進んでいるような報道と実際の現状とのギャップを知らされた。
	②留学中 (活動内容等)	(1)非常食を試食してもらった。 学校の友達に試食してもらったり、ホームステイ先で朝ごはんの代わりに非常食を出してもらったりして感想をもらった。 (2)アンケートに答えてもらった。 非常食を試食した感想や能登地震について話した時の感想などを伝えてもらったり、書いたりしてもらった。 (3)草木染めの感想をもらった。 草木染めを体験してもらうことができなかったので、私が家で作ってきたものを漢字を書いてプレゼントした。また、ハンカチとしてプレゼントをした。	②留学中 (成果・結果)	(1)、(2)について ・能登半島地震を知っていた人が5人中3人 ・自分の国と比べて日本のものはどうか、という質問に対してわからないと答えた人が5人中3人 ・改善できるところを聞いたところ、変えなくてよいと答えた人が5人中3人 ・温かいい食べ物を作ったらよいと答えた人が2人 ・私がホームステイした家は地震の備えがされていた ・草木染めは誰も知らなかった。 ・バンクーバーは建物が崩れるような地震が少ないと言っている人もいた。だが、ブリティッシュコロンビアの島の方は地震が多いらしい。 (3)について ・能登に行って体験してみたい。 ・草木染の自然への共存という言葉がすごく素敵。
	③留学後 (活動内容等)	(1)留学での活動を伝える。 実際に自分の探究活動を話し、意見をもらった。 (2)地域発展について考える。 もらった意見から今後の活動を考えた。	③留学後 (成果・結果)	(1)について まず、能登の草木染めについて聞いたところ、知らない人が多かった。能登の地震については聞いた人全員が知っていた。でも、能登半島地震のボランティアに参加していた人は私が聞いた中にはいなかった。そこで、能登の悲惨さを話したところ、みんな驚き自分でも調べていた。 (2)について これからの活動を話し合ったところ、まずは自分の行ったことをプレゼンして知ってもらうことから始め、草木染で、浴衣の帯などで作ることができたらいいのではないか。よく知られた物とコラボして、草木染めを広めたい。
(5)問いに対する答えと考察		火が使えなったため草木染め体験は実施できなかった。そこで、非常食文化を紹介することに力を入れ能登の魅力を伝えた。これを踏まえ、問いに対する答えとして、観光客が草木染めやほかの工芸品と組み合わせて実際に体験してもらい、「自分だけの作品」を持って帰ることができるイベントを提案する。また、非常食の紹介のように「能登の知識」や「復興支援」と組み合わせることで、社会的関心も呼びやすく、SNSや動画で体験の様子を発信して、能登での体験予約につなげることができる。 火が使えなかったことに対する改善策は、「火を使わずに草木染めの手順を確認できる動画や資料を調べておく」、「事際に体験できない場合を想定して調査方法を複数準備する」		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		・仮説が間違えているものもあったので比べられたこと。 ・実際に草木染めに触れてもらったこと。 ・アンケートに答えてもらったこと。 ・プレゼントを渡すことで質問に答えてくれる人が増えたこと。 ・参加者が文化や自然への関心を示したこと。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		火を使う方法しか考えておらず、できないということを想定していなかったこと。草木染めの体験ができなかった。突然のハプニングに対応しきれなかったこと。英語力が足りなく、質問しても回答をしっかり聞き取れなかったこと。 改善案：うまくいくと思い込むのではなく、うまく行かなかった場合を想定して対策を考えておく。実際に火を使わない簡易体験をしらべる。火使わずに色を付けられるキットや、自然素材のインク、スタンプなどで染める方法を用意する。工芸品と組み合わせて、体験も幅を広げて草木染めができなくても別の方法で魅力を伝える。活動前にリスクを想定し、代わりのプランをいくつか準備しておく。当日スタッフに資料を使って対応できるようにする。事前に関連する英語表現や質問フレーズを練習しておく。必要に応じて簡単な言い換えジェスチャーを使って理解を助ける。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		文化は体験と対話で伝わるということです。ただ、対話するだけでも、体験するだけでもダメで、二つを組み合わせることでしっかり伝えられたと思います。恥ずかしくても、自信がなくても、行動しなければ何も始まらない。だから、誰かがやるのを待つのではなく、自分がつなぐ存在になりたいと思います。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	能登の自然と色彩を世界に届けるサステナブルな挑戦		
	活動内容	今回の留学のアンケートを取ったり、聞いたりするインタビュー形式ではなく、次の留学では、実際にイベントに参加したり自然に触れたりして、肌で感じることが目標。草木染めを体験してもらい、それでバックやペンケースを作ることで能登を身近に感じてもらう。「能登自然×草木染め」のストーリーを紹介する。		

No	10

(1)探究活動の問い		イギリスの人々がもつ地震観は日本の人々がもつものとどのように異なり、イギリスの人々が地震に関して、より安心安全に日本に訪れられるようにするにはどのような対策が必要なのだろうか？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		能登半島地震を経験し、地震が他人ごとではない現象だと知った。しかし、世界には地震がほとんど起きない国もある。私たちは日本に住んでいて地震が起こりやすいということを知っているし、具体的な防災活動も行っているが、日本に来た外国人観光客などはどうだろう。日本人との防災意識のギャップを調べれば、実際に起きた際の混乱をおさえるための有効な対策が分かるのではないかと考えた。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		イギリスの人々の地震に対する防災意識は日本の人々のもつものより低いだろう。 有効な対策だと考えられるのは、地震が起きた際に逃げる場所やとるべき行動を示したポスターの作成である。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	留学前に通っている高校の一学年を対象に防災意識に関するアンケート調査を行った。	①留学前 （成果・結果）	179名分の回答が集まった。 98%が地震への対策を行っていた。 94%が水害への対策を行っていた。 地震直後の行動についてのクイズでは、正答率が47%だった。
	②留学中 （活動内容等）	留学中は現地でも同じ内容のアンケートの回答を呼び掛けた。当初はイギリスに長く住んでいる方の回答を集める予定だったが、滞在先が観光地に近いこともあり現地に住んでいる方への調査がなかなか進まなかった。 そこで、世界各国から人が集まる語学学校でもアンケート調査を行い、イギリス以外の地震が少ない国から来た人、また日本と同じくらい地震が頻発する国から来た人など、幅広いデータを集めることに変更した。	②留学中 （成果・結果）	同じ地震の多い国の間にも防災意識に差があることや、地震以外の災害との関係なども分かった。 また、地震が多い国かどうかを判断する国際的な基準はないため、ここでは「1980～2000の間に発生した、マグニチュード5.5以上の地震の数上位10か国」を地震が多い国であると仮定する。
	③留学後 （活動内容等）	留学中に集まった回答の考察を行った。	③留学後 （成果・結果）	地震の多くない国の人々は36%の人が地震への対策を行っていた。 クイズの正答率は76%だった。 地震の多い国の人々は100%の人が地震への対策を行っていた。 クイズの正答率は37%だった。
(5)問いに対する答えと考察		地震がほとんどない国でもほかの自然災害に備えていることがあり、避難経路の確認や非常用持ち出し袋の準備が出来ていたため、防災意識が低いとはいえなかった。それぞれの地域で、災害の特徴や地理的条件に合った災害対策がなされていた。 また、現地で行ったアンケートでは対象者が非常に限られてしまったため、有効なデータが取れなかった。 現時点では、イギリスの人々がもつ地震への印象や地震に関する知識は、日本の人々がもつものと大きな差はないといえる。 日本を訪れた外国人観光客に地震に関する情報をいくら与えたとしても、有事の際に焦ってしまっては、日本人同様情報をうまく活用できないだろう。 以上のことから、「外国人向け」、「日本人向け」というふうに災害対策を区分することにあまり意義がないと考える。日本人向けの対策がそのまま外国人向けの対策になるのではないか。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		アンケートを解答してもらうまでの流れがスムーズだった。事前にスクリプトを作っていったのが功を奏した。現地の方々が優しかったのか、自分の英語がうまく伝わったのか、調査母体が少なかったのかはわからないが、アンケートの回答を断られることはなかった。また、アンケート回答のお礼として、「果汁グミ」、「ハイチュウ」などの日本のお菓子をプレゼントしたが、これがとても好評だった。しかし、「果汁グミ」には豚由来のゼラチンが含まれており、宗教上の理由から、一人の友達に受け取ってもらうことが出来なかった。この出来事を通して、食文化の違いについて理解を深める必要があることを強く感じた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		当初は現地の人（イギリス人）を対象にアンケートを行う予定だった。人が集まるからという理由だけで観光地をアンケートを行う場所に選んでしまった。周りのほとんどが外国人観光客で、現地の人を対象にしたアンケートが行えない状況だった。アンケートの対象者を考えて実施する場所を決めるべきということを学んだ。スーパーやドラッグストアの前など、現地の方々が日常的に利用する施設などがあげられる。今後このような街頭アンケートを行うときは、アンケートの内容だけでなく、行う場所にも気をつけたい。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		正直に言うと、日本にいてもこれくらいなら調べられたのではないかと思うくらいの情報しか集められなかった。問いの設定の段階からつまずいていたのだと思う。唯一現地に行って感じられたことは、イギリスの人々がもっている地震観は、日本の人々がもつものと大きな違いはないということだ。地震が多い国の人は地震に対して備えている。地震がほとんど起こらない国の人は、地震への知識をある程度持ったうえで、ほかの災害に対して備えている。それぞれの国でそれぞれの環境にあった災害対策がなされていた。自分の国ではほとんど起こらないような災害に備えたり、むやみに恐れたりする必要は全くない。そのうえで、私は日本に来た外国人観光客が、予期せぬ自然災害に見舞われた際の不安を軽減できるような活動を行う。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	どんな情報が分かると安心？～防災情報サイトを作る～		
	活動内容	日本に来る予定がある人が、「地震が多いらしいから、ちょっと調べておこうかな」と思った時に使える、外国人向けの防災情報サイトを作る。災害が起こった際に人々、特に外国人がどんな情報を求めているのかを調べる。		

No	11

(1)探究活動の問い		日本とフィリピンの循環型経済の違いは何か。		
(2)探究活動の背景・動機・目的		フィリピンについて調べる中で、貧困問題が深刻であるにもかかわらず、ごみの回収や再利用といったビジネスが社会の中で成り立っていることを知った。このことに強い興味を持ち、「なぜ経済的に厳しい状況の中でも循環型の仕組みが成り立っているのか」を実際に現地で確かめたいと考えた。 一方、日本では制度やルールによって循環型経済が支えられているが、フィリピンでは人々の生活や仕事として循環が行われているのではないかと考えた。そこで、日本とフィリピンの循環型経済の違いを比較し、その背景にある社会や経済の仕組みを明らかにすることを目的とした		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		日本は制度やインフラによって循環型経済が成り立っているのに対し、フィリピンでは貧困を背景として、ごみの回収や再利用が「生活のためのビジネス」として成り立っており、それが循環型経済の一部になっているのではないかと考えた。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 (活動内容等)	・日本のリサイクル制度や循環型社会について調査 ・フィリピンの貧困問題やごみ処理の実態について調査	①留学前 (成果・結果)	・日本は制度中心、フィリピンは課題が多いという大まかな理解にとどまっていた
	②留学中 (活動内容等)	・街中でのごみの様子や回収のされ方を観察 ・現地の人々の生活の中でのごみの扱い方を確認 ・ごみを集めて売る人々の存在や働き方について知る	②留学中 (成果・結果)	・貧しい地域でも、ごみを集めて売ることで収入を得ている人々がいることを実際に確認した ・日本のように制度化された分別は少ないが、人々の生活の中で自然に資源が再利用されていることに気づいた ・循環型経済が「環境のため」だけでなく「生活のため」に成り立っていることを理解した
	③留学後 (活動内容等)	・現地での経験と資料を照らし合わせて整理 ・日本とフィリピンの違いを「制度」と「生活・ビジネス」の観点から比較	③留学後 (成果・結果)	・循環型経済のあり方は国によって異なり、背景となる社会や経済状況によって形が変わることを理解した
(5)問いに対する答えと考察		日本とフィリピンの循環型経済の違いは、その成り立ちにあると考える。日本では、法律や分別ルール、リサイクルシステムといった制度によって循環型経済が支えられている。一方でフィリピンでは、貧困という社会背景の中で、ごみの回収や再利用が収入源となり、「ビジネス」として循環が成り立っている。 つまり、日本は「制度による循環型経済」、フィリピンは「生活や生計と結びついた循環型経済」であると言える。この違いは、単なる環境意識の差ではなく、経済状況や社会構造の違いから生まれていると考えられる。 このことから、循環型経済は一つの形だけではなく、それぞれの国の状況に応じて多様な形で存在していることが分かった。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		実際に現地で観察し、貧困とビジネスが結びついている様子に気づけたこと。また、日本との違いを具体的に比較できた点が良かった。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		現地の人に詳しい仕事内容や収入について深く聞くことができなかった。今後は語学力を高め、より具体的な情報を得られるようにしたい。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		現地での経験を通して、同じ「循環型経済」という言葉でも、その意味や実態は国によって大きく異なることを学んだ。また、社会問題を理解するには実際の現場を見ることが重要だと感じた。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	貧困と環境問題を同時に解決できる循環型ビジネスはどのように実現できるか。		
	活動内容	他国の事例を調べ、持続可能なビジネスモデルを考える。		

Ｎｏ	12

(1)探究活動の問い		実践的な英語を身につけ、石川県の人口減少を食い止める方法を思考する		
(2)探究活動の背景・動機・目的		石川県は人口減少に直面しており、特に若者の流出が大きな課題だ。令和5年の推計では、生産年齢人口が前年比 4,513 人減の 626,886 人となった[1]。この流出の背景には、進学や就職時の都市部への移動があると考えられる。県内では教育機関や就業機会の選択肢が限られているほか、生活の利便性や文化的魅力が若者に知られていないことが要因としてあるだろう。そこで、人口増加数がオーストラリア1位であり、2032 年にオリンピックを控えるブリスベンの施策、まちづくり、そして人々の生活を分析するために現地で調査を行いたい。そうして得られた結果から、石川県のまちづくりに応用できることを見つけ出し、留学成果報告会などの機会に発信していきたいと考える。（参考資料:1 石川県の年齢別推計人口～令和5年 10 月1日現在推計～）		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		・ブリスベンでは大学・研究機関・成長産業が都市内に集積し、進学から就職までを同一地域で完結できる環境が整っている。一方、石川県では進学・就職の節目で県外移動が生じやすく、これが若者流出の主因となっているのではないか ・ブリスベンでは公共交通、住環境、ワークライフバランス、自然環境と都市機能の両立といった生活の魅力が若者に分かりやすく発信されている。石川県では実際の住みやすさに対して情報発信が不足し、若者に十分認知されていない可能性がある ・ブリスベンでは長期的な都市計画や成長戦略が市民に共有されており、将来に期待を持ちやすい。一方、石川県では将来像が若者世代に十分伝わっておらず、県外移動を選択する一因となっている可能性がある		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	厚生労働省のホームページで田舎から都会への人口流出の原因を探った	①留学前 （成果・結果）	厚生労働省の人口移動調査は、進学・就職・転職などのライフイベントに伴う地域間移動の動機を分析しており、地方出身者が都市圏へ転出する傾向をとらえている。特に若年層では、進学と就職を主な契機として都市へ移動する割合が高いという結果が示されている。これは地方に十分な教育機関や多様な職業選択肢が乏しく、若者が専門性の高い学びやキャリア形成を求めて都市部へ移る構造的な要因があることを示唆していると考えられる。また、生活インフラや文化的な魅力が都市部に集中していることも、若者の居住選択に影響しているのではないかと仮説を立てた。
	②留学中 （活動内容等）	留学中は、ブリスベンの人口増加や若者・移住者を引き付ける要因を明らかにするため、現地で複数の調査を行った。 まず、語学学校に在籍する生徒を対象にアンケートを実施し、「なぜ留学先としてブリスベンを選んだのか」という問いを通じて、都市としての魅力や評価されている点を探った。アンケートでは、学習環境だけでなく、生活のしやすさや都市の雰囲気、治安、自然環境など、ブリスベンでの暮らし全体に関する意見を収集した。また、滞在先のホストファミリーがインド出身であったことから、インドからオーストラリア、特にブリスベンへ移住した理由についてインタビューを行った。移住の背景として、就業機会や生活環境、家族にとっての暮らしやすさなど、留学生とは異なる視点から都市の魅力を聞くことができた。さらに、在ブリスベン日本人向けの交流イベントに参加し、日本人移住者や長期滞在者から話を聞く予定であったが、当該イベントは中止となった。そのため、日本人コミュニティに対する調査は実施できなかったものの、語学学校でのアンケートおよびホストファミリーへのインタビューを通じて、多様な立場の人々がブリスベンを選択する理由を把握することができた。	②留学中 （成果・結果）	語学学校の生徒を対象に行ったアンケートからは、ブリスベンの生活環境に対する高い評価が明らかになった。特に多く挙げられたのが交通の利便性である。クイーンズランド州では公共交通機関を片道50セントで利用できる政策が実施されており、移動距離に関わらず低価格で利用できる点が非常に魅力的であると回答があった。また、路線や運行本数も多く、通学や日常生活において不便を感じにくいという意見が見られた。加えて、年間を通して気候が穏やかで過ごしやすいことや、自然と都市機能がバランスよく共存している点も、ブリスベンを留学先として選ぶ理由として挙げられた。ホストファミリーへのインタビューでは、インドからブリスベンへ移住した背景として、子育てのしやすさが大きな理由であることが分かった。治安の良さや公共施設の充実、福祉制度が整っていることから、安心して子どもを育てられる環境があると感じたという。また、英語が公用語であるため、言語面でのハードルが低く、移住後の生活に適応しやすかった点も、移住を決断した要因として挙げられた。さらに、留学生活を通して私自身が感じたこととして、ブリスベンは多国籍な人々が集まる都市であり、留学生でも自然に馴染みやすい環境が整っていると感じた。街にはさまざまな国の文化や食が共存しており、日常生活の中で異文化に触れる楽しさがある。また、図書館をはじめとした公共施設が非常に充実しており、デザイン性も高く快適に利用できる点が印象的であった。これらの施設は留学生であっても無料で利用でき、学習面・生活面の両方で大きな支えとなった。加えて、街中にゴミ箱が多く設置されているなど、生活の細かな部分まで配慮が行き届いている点も、住みやすさにつながっていると感じた。
	③留学後 （活動内容等）	留学後は、学校内で行われた留学報告会や、その他の交流イベントにおいて、ブリスベンでの調査内容や留学生活の成果を報告した。報告会では、語学学校で実施したアンケート結果や、ホストファミリーへのインタビューから得られた知見を紹介し、ブリスベンが多くの若者や移住者を引き付ける理由について説明した。	③留学後 （成果・結果）	発表後には、「交通政策や公共施設の充実が生活満足度に大きく影響している点が印象に残った」「海外の事例を通して、日本の地方の課題を考える視点が新鮮だった」といった感想が寄せられ、聴衆にとっても地域づくりや人口問題を考えるきっかけとなった。また、質疑応答では、ブリスベンの多文化共生の実態や、石川県への応用可能性について質問があり、自身の考えを言語化して伝える機会となった。これらの発信を通して、留学で得た経験や調査結果を自分の中で整理するとともに、他者に分かりやすく伝える力を高めることができた。さらに、海外の都市事例を共有することで、身近な地域の課題を多角的に捉える重要性を伝えることができたと考えている。
(5)問いに対する答えと考察		石川県では、進学や就職を契機とした若者の流出が続いており、教育や就業機会の少なさに加え、地域の魅力が十分に伝わっていないことが課題であると考えた。そこで、人口増加が著しいオーストラリア・ブリスベンを調査対象とし、若者や移住者を引き付ける要因を明らかにすることを目的とした。留学中は、語学学校の生徒へのアンケートと、インド出身のホストファミリーへのインタビューを行った。アンケートからは、公共交通機関が片道50セントで利用でき、路線数も多いことによる交通の利便性、過ごしやすい気候、自然と都市のバランスの良さがブリスベンの大きな魅力であることが分かった。ホストファミリーへのインタビューでは、治安や公共施設、福祉が充実しており子育てしやすい点、英語が使えるため移住しやすい点が移住理由として挙げられた。また、留学生活を通して、多国籍な環境で馴染みやすいことや、多様な文化や食に触れられること、留学生でも無料で利用できるおしゃれで充実した公共施設の存在が、生活の満足度を高めていると感じた。留学後は、学校内の留学報告会や交流イベントでこれらの成果を報告し、地域づくりについて考える視点を共有した。以上より、若者が都市を選ぶ理由は、進学や就職先の多さだけでなく、交通、公共施設、多文化共生、安心して将来を描ける生活環境が総合的に整っているかどうかにあると考える。石川県においても、若者目線で生活の魅力を可視化し、発信していくことが人口流出の抑制につながると結論づけた。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		留学中、在ブリスベン日本人向けイベントに参加し、移住者から話を聞く予定であったが、直前でイベントが中止となるハプニングがあった。当初の調査計画が実施できなくなったため、そのまま活動を止めるのではなく、調査目的を改めて見直し、現地で実行可能な方法へと柔軟に切り替えることを意識した。具体的には、若者や移住者がブリスベンを選んだ理由を探るという本来の目的に立ち返り、語学学校の生徒を新たなアンケート対象とした。留学生であれば、進学や生活環境の視点から都市の魅力を捉えていると考え、質問内容を調整した上でアンケートを実施した。また、滞在先のホストファミリーが移住者であったことを生かし、インタビューを行うことで、家族や長期的な生活の観点からも調査を補完することができた。このように、予期せぬ事態に対しても状況を分析し、目的に沿った代替手段を自ら考え、行動に移すことができた点は、活動中における大きな成果であったと考える。この経験を通して、計画通りに進まない場面でも、柔軟に対応しながら学びを深める力の重要性を実感した。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		留学中、在ブリスベン日本人向けイベントが中止になった際、私はその時点で参加を諦めてしまい、主催者や関係者に直接連絡を取ったり、現地を訪れて話を聞くといった行動までは取らなかった。この判断により、日本人移住者から直接意見を聞くという、当初想定していた貴重な調査機会を十分に生かすことができなかった。後から、同じトピタテに参加していた他の学生の中には、あるイベントが中止になった後も主催団体に直接訪問したり、関係者が現地に来る可能性を考えて会場周辺で待機したりするなど、粘り強く行動した人がいたことを知った。その話を聞き、困難な状況であっても、もう一歩踏み込んで行動することで、新たな出会いや情報を得られた可能性があったと強く感じた。この経験から、想定外の事態が起きた際に、状況を受け入れるだけでなく、「他にできることはないか」と問い続け、行動し続ける姿勢の重要性を学んだ。今後は、計画が思うように進まなかった場合でも簡単に諦めるのではなく、より粘り強く主体的に行動し、機会を最大限に生かせるよう取り組んでいきたい。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		今回の探究活動を通して、若者が都市を選ぶ理由は、進学や就職先の多さだけでなく、交通の利便性、公共施設、多文化共生、生活のしやすさといった環境が総合的に整っているかどうかにあると学んだ。ブリスベンでの調査から、こうした要素が若者や移住者を引き付けていることを実感し、地域づくりを考える上で重要な視点だと感じた。また、探究活動では計画通りに進まない状況への対応力が重要であることを学んだ。イベント中止という想定外の事態に対し、調査方法を柔軟に切り替えることで目的を達成できた一方、さらに踏み込んだ行動ができなかった点は課題として残った。この経験から、困難な状況でも諦めず、「他にできることはないか」と考え行動し続ける姿勢の大切さを学んだ。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	交通や公共施設、多文化共生の取り組みは、若者の定住意識にどの程度影響を与えているのか。		
	活動内容	地域資源の現地調査を実施する。公共交通の運行本数や利用しやすさ、公共施設の種類や立地、利用状況を実際に確認し、若者の生活にどの程度役立っているかを把握する。また、多文化共生に関するイベントや支援制度の内容、参加者数などを調べ、地域の取り組みの実態を明らかにする。さらに、自治体の統計資料や定住率、人口動態データを分析し、若者の転入・転出傾向と施策との関連を検討する。他地域との比較を行うことで、定住意識を高める要因をより客観的に導き出すことができる。		

Ｎｏ	13

(1)探究活動の問い		ジェンダーにおけるニュージーランドと日本の違いはどんなところにあり、それはどうすれば埋めることができるのか？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		「男なんだから荷物運んで」「女の子らしくしなさい」など、幼少期からこのような言葉を耳にするたびに違和感を覚えていた私は、この違和感は世界でも同じなのかと疑問を抱いた。そこで調べてみると、日本は数値（ジェンダーギャップ指数）で見てみても男女平等があまりすすんでいないことが発覚し、たいして世界にはニュージーランドのような男女平等が叶い始めている国があると知り、そこ違いを身をもって体験したくなったから。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		今回私は制度的なものではなく、そこに住む人々の意識的問題、いわゆるジェンダーバイアスのほうに着眼した。それをふまえ、ニュージーランドでは「女の子らしく」「男の子らしく」という考え方すら存在しないのではないかと考えた。だからこそ、そういった意識から、家庭内や職場内における役割・立場の差もあまりないはずだと想定した。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	まずは日本において306名の方にアンケートを行った。対象は私の通う高校の生徒と先生方、家族やその周りの方、そしてSNSで募集した全国のトビタテ生である。おおまかな内容は男女差別を受けた経験や日本の現状（ジェンダーギャップ指数に基づき、世界118位という数字）を知っていたかという意識調査などである。	①留学前 （成果・結果）	アンケート結果として、日本では52%の方が世界118位という現状を知っていたのに対し、ジェンダー平等がすすんでいると回答した人は43%であった。また、実際に「女の子らしい座り方」「女の子らしい言葉遣い」「男は泣くな」「男子なら荷物持って」といった、性別による行動の制限・命令を経験したことがあるという声があがり、このようなことを経験したことがあるという人は全体で70%ほどいたことが分かった。これらから、日本には潜在的なジェンダー問題が存在しており、現状に自覚があっても解決につながっていない現代の課題というものがより明確になったと考えた。
	②留学中 （活動内容等）	ニュージーランドに住む方228名に街頭インタビューを行い、データを集めた。ここでの質問項目としては、日本でのアンケートをふまえ、「女性は家事、男性は仕事」「男性のほうが偉い」という、特に男女での偏りが見られた2つに焦点をあてて調査をした。また、街のトイレや働く人々に着目して街頭調査も行った。	②留学中 （成果・結果）	インタビュー調査を通して、今回着目した2点（家庭内と職場内）については、男女であまり偏りのない回答が得られ、共通して「女性と男性、どちらの場合もありえるのでは？」と回答してきた人がいた。さらにこの回答は、私から提案したのではなく、インタビュー該当者が自ら「どちらもはだめ？」と聞いてきたことから、潜在的なジェンダー平等が身についていることが考えられる。また街頭調査では驚いたことに、日本でよく見る赤と青のトイレのピクトグラムをニュージーランドでは一度も見なかった。形状による違いはあるものの色の区別がされていないことは日本との大きな違いだと思う。
	③留学後 （活動内容等）	より多くの人にこの違和感を感じ、日本の現状について気付いてもらいたかったため、県や校内で発表をした。また、インスタグラムやTikTokで今回の留学と成果について発信した。	③留学後 （成果・結果）	県や校内の発表では、積極的に質問にも応じ、大学の教授の方や校内の生徒・先生方、さらには個人的に聞きに来てくださった民間の方々にまで多く興味を与えられたと思う。加えて、SNSでの発信についても、合計して15万再生を超える方々に見ていただいたので、大きな影響を与えられたのではないかと考えている。また、そこでいただいたコメントにもすべて返信しており、彼らも私のように抱いてくれた違和感や疑問に答えることで、ジェンダー平等実現のきっかけとなる「意識の変化」をもたらしていると思う。
(5)問いに対する答えと考察		ニュージーランドと日本の大きな違いは、潜在的なジェンダーバイアスの有無にあり、それが家庭内や職場内、そして公共のちょっとした表記にもあらわれているといえる。ここでのジェンダーバイアスとは。「男だから荷物を持って」がだめなら、「男も女も荷物を持って」にするのではなく、そもそも性別によって行動を区別することが理にかなっていないと思うので、ここでニュージーランドで感じた”潜在的なジェンダー平等”というものが活かせると思う。つまり、男女におけるイメージや偏見が先入観となり、違和感の含むような言動を引き起こしていると考えられるので、「女だから」「男だから」という制約をつけずに考えることが重要であり、ジェンダー問題に対する意識的問題の解決につながると考えられる。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		信憑性・説得力のあるデータを得るには、量が多くないと元も子もないと考えたため、勇気をふりしぼって、怖くても自信がなくても積極的に声をかけたことは大成功だったといえる。そのおかげで200人超の方々に協力していただくことができたし、興味深い意見にも出会えた。また、ここでの機会を通して、交流ができた人や、私に応援の言葉をかけてくださる人にも出会えたため、モチベーションを上げるという面でも、自分にもプラスの影響を見出すことができた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		街頭インタビューでの、ネイティブスピーカーの方々の話す英語が早すぎることと、専門用語が出てきて理解ができないことが失敗だったと思う。これができないと調査にも影響が出るため、私は実際に留学中に行った改善策として、理由の部分だけ選択制にし、彼らの主張をおおまかに把握してから細かく探っていく方式にした。この失敗や改善は、自分の英語力不足が要因だと思うので、また留学したいと考えている私にとって、語学力向上は今後も必須だと感じた。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		探究活動には、やりすぎなくらいの十分な計画が必要であるとわかった。活動前にできることはすべて完璧にしておくと、探究も難なくすすむし、より深く正確な結果が得られるといえる。また、活動内では、自分の積極性が大きくデータの質に関係するとも考えた。自分のしている探究に自信がなくても、誰かに頼ったり、意見を共有したりするだけで、新しい扉が開けたり、発展したりすることがあるかもしれないということを身をもって感じたからだ。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	なぜ日本には世界と比べても多くジェンダーバイアスが人々にもたれているのだろうか？		
	活動内容	歴史的な要因を探るため、まずは本を読み、知識を蓄える。その後、今回は質問形式でのアンケートだったが、新しく、実験という形式で人々の意識調査をしてみたい。たとえば、4コマ漫画を描いて、「ごはんできたよ～」に対し、女性か男性かどちらの声で想像しましたか、と尋ねるなど、こういった、人々の本質的な考えを探れる調査をふまえ、その傾向を調べることで要因を推測したいと思う。		

Ｎｏ	14

(1)探究活動の問い		社会保障制度の充実は幸福度ランキングに関係があるのか		
(2)探究活動の背景・動機・目的		SNSを見ている時に社会保障制度の不十分さを訴えかけている投稿を目にし、石川県民は現在の社会保障制度に満足しているのかどうかが気になったから。また少子高齢社会なので今後より必要になってくるものだと思ったから。また社会保障制度が充実している国は幸福度ランキングが高い傾向にあったので、幸福度ランキングと社会保障制度との関係性が気になったから。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		イギリスは介護などの分野に関心がある人が多く、社会保障制度の必要性を理解している人が多いので社会保障制度が充実しているのではないだろうか。また社会保障制度が充実していることで生活に対する不安がないことが幸福度ランキングに大きく関係しているのではないだろうか。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 (活動内容等)	金沢市の介護保険課の方に金沢市の介護制度について話を聞いた。お話を伺った後にアンケートの内容を改善して金沢市に住んでいる方約30人にアンケートを行った。アンケートの内容は介護への関心度、ヤングケアラーという言葉の認知度、社会保障制度の満足度など。またヤングケアラーに対する相談を行っている金沢市の機関に連絡を取ってお話を伺おうとしたら、特に支援の制度はないと言われた。	①留学前 (成果・結果)	アンケートの実施前に介護保険課の方にお話を伺うと、「制度自体は充実しているが突然身内に介護が必要になった際にどこに相談すればいいのかわからない」と言っている方が多いということを聞いて、社会保障制度が充実しているか、よりも介護に関心があるか、知識が定着しているかについて調べるためにアンケートの内容を変更した。修正後の内容でアンケートを行った結果、約8割の人が介護に関心があると回答した。一方で、若い年代の方はあまり介護に関心がないことがわかった。また介護の基本的な質問も7割の人が答えられない、という結果になった。またヤングケアラーという言葉の認知度は向上しているがどのような支援があるのかしらない人は多かった。
	②留学中 (活動内容等)	オックスフォードの市役所に行き、介護のパンフレットをもらい、金沢市のパンフレットと内容を比較した。また金沢市で行ったアンケートと同じ内容のアンケートを行い、金沢市でのアンケート結果と内容を比較した。	②留学中 (成果・結果)	パンフレットの内容比較より、オックスフォードの介護パンフレットは介護施設の情報などが多く掲載されていて、金沢市の介護支援メインのパンフレットに比べて介護を受ける側のニーズにあっていると思った。またアンケート結果の比較により、オックスフォードは介護に関心がない人が6割以上いたが、介護の基本的な知識が定着している人が多かった。またヤングケアラーという言葉の意味、支援内容をともに知っている人は金沢市は1割だったのに対し、オックスフォードは約8割いた。若い人もヤングケアラーへの支援内容まで知っていたのでなぜしっているのかを16歳の学生に聞いた。その学生の学校では授業でヤングケアラーについて学ぶことがあるからだとわかった。
	③留学後 (活動内容等)	金沢市で開催されたヤングケアラー講演会に参加し、実際にヤングケアラーだった方々のお話を聞き、今後必要になってくる支援やヤングケアラーに対する考え方がどのように変化してきているのかを学んだ。	③留学後 (成果・結果)	親や身内の介護などにより学校生活を十分に送れていない学生だけでなく、学生時代にヤングケアラーで学校生活を十分に送れなかった若者にも支援が届くようにヤングケアラーの定義が変更されていることを学んだ。また学校生活、仕事に影響が少なくなるようにそれぞれの人の生活に合わせた介護プランを提供できる体制を整えていることがわかった。だが、金沢市内ではヤングケアラーに対する十分な支援がないこともわかった。
(5)問いに対する答えと考察		アンケート結果やオックスフォードの学生へのアンケートにより社会保障制度の充実さと幸福度はあまり関係がないと考えた。一方で金沢市の学校では介護やヤングケアラーについて学ぶ機会がないが、オックスフォードは学生時代から介護、ヤングケアラーについて学ぶ機会がある。そのため介護に関心がなくても困ったときにどこに相談すればよいか、どのような支援を受けられるのか、を知っている人が多い。このことがオックスフォードの学生との間に生じる知識の定着度の違いであると考えた。したがって学生時代からの教育により介護などの面で将来への不安が少ない事が幸福度に関係していると考えた。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		アンケートを行う中でヤングケアラーという言葉の意味や存在について知らない人にもヤングケアラーについて説明することができて、探究活動の最終的なゴールである、認知度を向上させて介護にもっと関心をもってもらうようにする、という目標を達成することができた。また金沢市役所の介護保険課の人の話を聞いた上でアンケートの内容を変更させたので、効率よく探究活動を行うことができた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		イギリスでアンケートを実施した際には英語で早口で喋る人もいて細かいことをメモできないこともあった。だが重要なことを聞き逃さないようにレコーダーを持っていっていたのでそれを利用して聞き逃しを補強した。また予定では50人ほどにアンケートする予定だったのが、実際には30人ほどにしかアンケートできなかった。金沢市では声をかけたほとんどの人がアンケートに協力してくださり、スムーズに終わったのでイギリスでも同じようにできると思ってしまった。しかし実際には断られる事が多く、寮の外出時間の制限もあり2日間で30人にしか聞くことができなかった。今後アンケートをする際はうまくいかないことも想定して余裕をもって行動したいと思う。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		万が一のことを考えて早めに行動すること、 効率的に探究活動を行うために段階を踏んでなにが必要かをよく考える。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	介護の分野への関心を高めて、介護分野への就職率を向上させるには？？		
	活動内容	今回の探究では授業で介護などについて学べるか、ということについてイギリスで2人、金沢では自分の高校、姉、友達の高校だけでしか比較できなかった。なのでもっと多くの人に質問して違いを考えたり、介護分野への就職率なども比較したりしたい。また現在介護分野への就職率が低下しているという記事を目にすることが多く、私自身も探究活動前は介護に関心がなく、介護分野への就職も考えたこともなかった。少子高齢化が進む中で介護分野の就職率の低下は今後の課題になってくると思う。したがって若い人の介護への関心を高めるために行っている取組はあるのかなどを調べたい。		

No	15

(1)探究活動の問い		主体性を引き出すニュージーランドの探究型学習は、日本とどのように異なるのか？ また、日本に導入するために必要な取り組みは何か？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		私は将来、教育に携わる仕事に就きたいと考えています。そのため、日本だけでなく海外の教育の在り方を自分の目で見て学びたいと思い、ニュージーランドへの留学を決意しました。ニュージーランドと日本の教育の違いを実際に体験することで、それぞれの良さや特徴を比較し、日本の教育をより客観的に捉えたいと考えたことが動機です。特に、生徒の主体性や多様性を重視する教育環境に関心を持ち、その実態を直接学びたいと思いました。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		ニュージーランドは多様性を重視する社会であると聞いていたため、その社会的背景が教育方針にも反映され、生徒一人ひとりの個性を尊重する教育が行われているのではないかと予想していました。そのため、学習内容だけでなく、授業中の発言の機会や評価の仕方にも違いがあるのではないかと想定していました。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	まず、私たち生徒が探究型学習についてどのように捉えているかをアンケート調査により可視化し、現状の理解や課題を整理しました。さらに、ニュージーランドと日本の教育制度や授業方法、学校環境の違いについて事前リサーチを行い、留学中に注目すべきポイントや観察項目を整理しました。	①留学前 （成果・結果）	今回の留学を通して、ニュージーランドと日本の教育の違いを実際に観察し、比較しようと思いました。ニュージーランドの教育に関して、留学中に注目すべきポイントや観察項目を整理しました。
	②留学中 （活動内容等）	留学中は、ニュージーランドの教育現場を実際に観察し、授業や学校生活の様子を記録しました。授業では、生徒が主体的に発言し、互いに意見を交換しながら学ぶ様子や、教師が生徒の多様な考えを尊重して指導している様子を中心に観察しました。また、現地の生徒や教師にインタビューを行い、教育方法や授業に対する考え方、日常の学習習慣について話を聞くことで、より具体的な理解を深めました。さらに、事前に設定した仮説に基づき、授業中の発言頻度や活動内容、教師の関わり方などを比較・記録し、ニュージーランドと日本の教育の違いや特徴を整理しました。	②留学中 （成果・結果）	留学中の観察やインタビューを通して、ニュージーランドの教育の特徴と日本の教育との違いを具体的に理解することができました。ニュージーランドでは、生徒が主体的に考え、意見を自由に出し合いながら学ぶ授業が行われており、多様性を尊重した環境が整っていることを実感しました。一方で、自由度が高いために授業の進行や学習内容が分かりにくくなる場合もあることがわかりました。
	③留学後 （活動内容等）	留学から帰国後は、ニュージーランドでの経験をもとに、教育の比較や学びを深める活動を行いました。具体的には、留学中に観察した授業の様子やインタビュー結果を整理し、ニュージーランドと日本の教育の違いや特徴をまとめました。また、留学前に立てた仮説が正しかったかを振り返り、成果や課題を分析しました。 さらに、留学で得た気づきを学校の仲間と共有するため、発表資料を作成したり、ディスカッションを行ったりしました。	③留学後 （成果・結果）	ニュージーランドの教育では、生徒の主体性や多様性を重視し、授業中に自由に意見を発表し、互いに議論しながら学ぶ環境が整っている一方で、生徒に大きな自由が与えられているため、授業の進め方が分かりにくかったり、学習内容が偏る場合があるというデメリットも感じました。日本の教育についても改めて理解を深めることができました。授業の進め方や学習内容は体系的に整理されており、基礎知識を効率的に習得できるという良さがあることを確認できました。今回の経験を通して、教育環境や方法にはそれぞれのよさがあることを理解し、自分が将来教育に携わる際には、両者の良さを活かした指導がしたいなと感じました。
(5)問いに対する答えと考察		留学を通して得た答えは、教育環境や教育方針の違いが授業の進め方や生徒の学び方に大きく影響している、ということです。ニュージーランドでは生徒の主体性や多様性を重視し、意見を自由に出し合いながら学ぶ環境が整っていました。一方、日本では授業内容や進行が体系的に整理され、基礎知識を効率よく習得できる特徴がありました。考察として、教育にはそれぞれ長所と課題があり、どちらか一方が優れているわけではないと感じました。ニュージーランドの自由度の高さは主体性や創造性を育む一方で、学習の方向性がぶれやすいという課題があります。日本の教育は基礎力の定着に優れる一方で、生徒の発言や主体性を伸ばす機会が限られる場合があります。今回の経験から、将来教育に携わる際には、両国の教育の良さを取り入れ、生徒一人ひとりの成長を促す指導を行うことが重要であると考えました。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		事前に立てた仮説や観察項目に沿って、授業や学校生活を効率よく観察・記録することができました。また、現地の生徒や教師へのインタビューを通して、自分の質問を整理して的確に伝え、必要な情報を引き出せたことは大きな成果でした。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		留学中の活動では、インタビューや調査の際に予定通りに進まなかったことがありました。大都市でインタビューを試みましたが、観光客が大半で地元出身の方に質問できない状況が多く、十分な情報を得られませんでした。人が多い場所を選んだものの、環境が騒がしく落ち着いて質問できないことや、予想以上に英語での質問や理解に時間がかかり、計画通りに進められませんでした。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		探究活動や学習に取り組む際には、事前の準備だけでなく、現場で臨機応変に対応する姿勢が大切であるとわかりました。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	「なぜ国の中で教育格差が生まれるのか」		
	活動内容	教育格差の原因や背景について深く分析していきます。具体的には、都市部と地方の学校視察を行ったり、留学中に集めたインタビュー内容を整理して要因を明確化する予定です。また、学校内での発表やディスカッションを通して、自分の考えや発見を仲間と共有し、意見交換を行います。		

No	16

(1)探究活動の問い		オーストラリアの人々は、動物や環境をどのように守っているのか？人と動物が共存するために大切なこととは？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		日本での野生動物への対応に違和感を持ったから。日本では野生動物が街に出たら、殺処分してしまうことや、警察官などの専門的な知識がない人が対応することが多い。そもそも野生動物が街に降りてくる原因は地球温暖化など人間に原因があることが多いにも関わらず、殺されてしまうことに違和感を覚えた。他の方法があると考えたため、この問いを設定した。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		日本では動物を助けるという行為はボランティアや団体が行うものだという風潮や動物と人間の暮らしは別という考えが一般的のように感じるが、現地では人間の暮らしと動物や自然が密接に関わっており、国民の意識が異なる。国民が動物や自然も視野に入れて生活をしているため、環境保全や動物愛護の取り組みが盛んに行われていると考える。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	・現地で行われている動物愛護や環境保全に関わる活動をインターネットで調べた。 ・ホームステイ先や学校の先生方に配るための日本のお土産の準備 ・現地で行うアンケート用紙の準備	①留学前 （成果・結果）	・事前に調べておいたおかげで現地に行ってから質問しやすかった。 ・アンケートを準備したが、実施しているうちに内容が不十分であることに気がついて作り直した。日本で試してみたほうが良かったと思った。
	②留学中 （活動内容等）	・ホストファミリーが行っている動物愛護に関する活動についての質問 ・ホストファミリーの知り合いや近所の人、学校の先生、生物学者を対象としたインタビュー 【アンケート内容】 ・動物愛護や環境保全に関わる教育を受けたことがあるか ・動物愛護や環境保全のために大切だと思うことは？（選択式：1野生動物に餌を上げない　2野生動物に触れない　…など）	②留学中 （成果・結果）	【実際に行われていた活動や現地の環境】 ・動物専用のレスキュー隊 ・水を大切にする風潮 ・幼少期からの動物愛護に関する教育 ・野生動物に触れない、餌をあげないなどの注意喚起の看板の設置（子供や観光客でもわかりやすいようにイラストや大きな文字で書かれていた。） ・野生動物との距離が近い（公園や住宅街にワラビーの群れがいた） ・野生動物出没注意の道路標識 ・プラスチック製品の配布禁止
	③留学後 （活動内容等）	・在籍高校での成果発表 ・インスタによる活動報告 ・地元で行われた成果発表会でのパネル紹介	③留学後 （成果・結果）	・留学の楽しさや大変さを友だちや他の学校の人に知ってもらうことができた。 ・留学を通じて留学仲間や現地での繋がりができた。 ・留学に興味を持った人から質問を受けるようになった。（体験談や語学力の向上についてなど）
(5)問いに対する答えと考察		日本と現地の大きな違いは国民の意識の差にあると考える。また、幼少期における動物愛護の教育の有無や野生動物との距離の差も大きく影響していると感じた。現地の住宅街でも緑が多いように感じた。日本では住宅街といえば家が立ち並んでいる事が多いが、現地の住宅街は植物が置かれていた。また週末にはビーチや山に行くなど自然を通じて娯楽を楽しむ人が多く見受けられた。よって、環境や動物との距離が近い分、それらを大切にしようという意識が芽生えやすいのだと思う。実際にホストファミリーと過ごしているとテラスで夕食を食べたり、週末は海や川に行って過ごしていることが多かった。ホストファミリーだけでなく、沢山の人がビーチや公園などに集まっていた。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		勇気を振り絞ってアンケート調査を実施することができた。自分から積極的にインタビューに行き、情報を集めることができた。先生や友達とも仲良くなり、会話を楽しむことができた。わからないことがあったらすぐに質問しに行くことで不安を取り除くことができた。自分のやりたいことや困っていることをつたない英語でも表現することで誤解を生むことなく生活することができた。最後に出会った人に感謝の気持ちを伝えることができた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		実際に英語を話すとなると緊張して簡単な単語が出てこなかったり、うまく説明できないことが多くあった。頭の中では聞きたいことがたくさん浮かんでいてもそれを表現できないことにもどかしさを感じた。また、調べ方が浅かったため、出発時の荷物の重量をオーバーしてしまった。さらに、他の国から来た留学生にもアンケートを取ろうと考えていたが、8月はほとんどが日本人で、想定していたよりも回答者が少なくなってしまった。今後は下調べを入念に行い、もしものケースを想定して準備を行う。そのためには早い段階で準備を始めることが大切。実際に日本にいるときに家族や友達を対象としてシミュレーションしてみる。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		私は留学に行く前は、失敗を恐れることが多く、自分から積極的に人と関わることが少なかった。しかし、留学を通して、様々な人とのつながりやコミュニケーションを取ることの楽しさを学び、日本での友達や先生との関係が深くなった。他にも、留学直前にあった不安を学校の先生や家族と素直に話すことで自分を客観的に見ることができた。留学中に起こったことはほとんどが想定外だったため、失敗を恐れることが減った。また、想定外のことが起こったときに状況を読み取り、臨機応変に対応することができるようになった。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	沢山の人と関わると人は前向きになれるのか。		
	活動内容	性別、国、年齢などが異なる人と仲良くなることでその人自身の考え方はどう変化するのか。短時間のグループワークから長期間に渡る交流を通してどのくらいの期間で何人ぐらいの人と関われば変化が起こるのかを検証する。		

No	17

(1)探究活動の問い		能登に人の流れを持って来るには？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		能登から外への人の流れを食い止め、外から能登への人の流れを回復させ、能登半島地震の影響で被害にあい失われつつある伝統文化を保全するため。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		観光業績ランキング1位のアメリカでは情報発信のための様々な工夫が施されている。そのため能登への人の流れを回復させ能登を復興させるには、情報発信が鍵になると考えた。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	能登の魅力をアメリカ留学で発信するための準備として、現地の「祭り会館」や「役場」を訪問しました。 直接足を運び、祭りの歴史や復興に向けた自治体の取り組みについて、生の声や一次情報を収集。	①留学前 （成果・結果）	単なる観光案内ではない、能登の力強い精神性や現状を反映したプレゼンテーションの作成が可能となりました。現地で得た確かな情報をもとに、アメリカで能登の現状を伝えることができた。
	②留学中 （活動内容等）	留学中は、能登の復興支援と魅力発信のため、多角的な活動を展開しました。まず街頭インタビューを行い、現地の方々の日本や能登に対する認知度を直接調査。その結果を踏まえ、相手の関心に合わせた能登のプレゼンテーションを実施しました。 また、日本のお菓子をプレゼントする文化交流も取り入れ、親しみを持ってもらう工夫をしました。	②留学中 （成果・結果）	留学中、多くの方々に街頭インタビューを敢行し、直接対話を重ねることで「言葉の壁を越えて現地の心に届く情報発信」のあり方を肌で学びました。
	③留学後 （活動内容等）	役場を訪問し、アメリカ留学で実施したアンケート結果をまとめた資料を共有しました。現地の生の声をもとに、能登への人流を創出するための新たな企画を提案しました。	③留学後 （成果・結果）	能登への人流を創出するための新たな企画を提案。留学での学びを地域の未来に繋げる、具体的な一歩を踏み出すことができた。
(5)問いに対する答えと考察		私は、能登の復興には「魅力の発信」と「アクセスの改善」のどちらも欠かせないと考えています。アメリカ留学中、街頭インタビューやプレゼンに挑戦しましたが、能登の現状や魅力が世界にまだ届いていないことを痛感し、悔しい思いをしました。 帰国後、この課題を解決するために役場を訪れ、留学で集めたアンケート結果をもとに情報発信の強化を提案しました。また、実際に人を呼び込むためには、PRだけでなく、二次交通などの「移動のしやすさ」を整えることが必要だと、自分の考えをぶつけました。情報の力で能登を知ってもらい、交通の壁をなくすことで、世界中から人が集まる能登をつくりたいです。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		活動の中で特に心がけたのは、常に笑顔で明るく話しかけることです。アメリカでの街頭インタビューでは、見知らぬ高校生に声をかけられる相手の立場に立ち、威圧感を与えず、不快な思いをさせないような話し方や距離感を意識しました。拙い英語であっても、表情や振る舞いで誠実さを伝えることで、多くの人が心を開いてアンケートに協力してくれました。この経験を通して、情報発信において大切なのは言葉の正確さだけでなく、相手へのリスペクトと思いやりであることを学びました。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		活動中、QRコードを用いたアンケートを試みましたが、見知らぬ人からの提示に「詐欺ではないか」と警戒され、回答を得られないことが多々ありました。デジタル技術の便利さだけでなく、海外での防犯意識や信頼関係の重要性を痛感した失敗でした。 この経験から、一方的にデジタルツールを差し出すのではなく、例えば「紙にシールを貼ってもらう形式」のように、相手が安心して視覚的に参加できるアナログな工夫の必要性を学びました。この反省を活かし、次回の提案ではより相手の立場に立った対話の手法を取り入れたいと考えています。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		当初は街頭インタビューで無視されるたびに落ち込んでいましたが、活動を続ける中で「無視されるのは当たり前」と割り切れるようになりました。具体的には、「3人に1人が答えてくれれば大成功」という心の余裕を持つことで、失敗に一喜一憂せず、一歩前へ踏み出す積極性を維持できることに気づきました。 この「失敗を前提とした前向きな姿勢」は、今後の語学学習や新たな挑戦においても、壁にぶつかった際の大きな教訓になると確信しています。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	『不便さ』を魅力に変える交通戦略とは？		
	活動内容	これまでの経験を活かして、能登の「不便さ」を魅力に変える新しい交通の仕組みを考えていきたいです。 具体的には、まず能登でシェアサイクルやローカル線に自分で乗り、移動中に見つけた素敵な景色や寄り道スポットを「観光客の目線」で探し出す現地調査を行います。同時に、留学先のアメリカや海外のスローモビリティの事例を調べ、能登の自然にぴったりの移動手段を検討します。これらの発見を、移動そのものが楽しくなるような日英併記の「寄り道マップ」にまとめ、SNSで世界に発信します。さらに、役場や地域の方々へ「あえてゆっくり巡る楽しさ」を提案し、みんなで能登の新しい移動のあり方を見つけていきたいです。		

No	18

(1)探究活動の問い		砂浜の美しさを保つためにオーストラリアではどのような取り組みを行っているのか また、海洋汚染にどの程度の関心と意識をもっているか		
(2)探究活動の背景・動機・目的		のと里山海道を車で通っているとき、私の頭の中に残っていた綺麗な千里浜とはかけ離れたゴミが散乱した砂浜を見て何かできることはないかと思ったことがこの探究の背景と動機です。海に囲まれた国同士で石川県でも取り扱えるオーストラリアのクリーンビーチ政策をみつけることが目的です。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		清掃ボランティアを開催する頻度が多いのではないか ポイ捨てに厳しそう(罰金など) 国や市が国民に清掃ボランティアの機会を多く与え国民も自主的に参加しているのではないか また、国や市がお金を使い、ごみを減らしているのではないか		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 (活動内容等)	「クリーンビーチいしかわ」という団体の白山市のビーチの清掃ボランティアに参加し、ゴミを拾いながら観察・記録を行いました。清掃後クリーンビーチいしかわの運営の方にインタビューをして、近年のゴミ状況やどの世代に清掃ボランティアに参加してほしいか、この団体の活動をどう広げていきたいかなどを聞きました。そして、SNSを利用してオーストラリアのクリーンビーチへの取り組みを事前に調べました。	①留学前 (成果・結果)	2013年から砂浜のゴミが約30%減少している ボランティア率が約25%と多い オーストラリア発祥のゴミ回収装置シービンがいろんな場所で使われている 砂浜にゴミはほぼなかった！ インタビューの結果、清掃ボランティアに参加したことのある住民はいなかった 国や市がお金をかけて毎朝ごみ収集車を砂浜に走らせている(主要なビーチのみ)
	②留学中 (活動内容等)	ホームステイ先の近くのビーチやゴールドコーストのビーチ合計4ヶ所を巡り、砂浜のゴミ状況の観察・記録、人の多さやゴミ箱の数を調査しました。そしてホストマザー、現地の人、語学学校の先生、生徒にインタビューをして、クリーンビーチを実現するために私たちや国がどうするべきかなど複数の質問をしました。	②留学中 (成果・結果)	清掃ボランティアには日程が合わず参加できなかったが実際にビーチで行われているカヌー大会を見たり、清掃車が入った跡を実際見れたゴミ箱の数調査ができた (1.6kmに及ぶビーチで15個発見！)
	③留学後 (活動内容等)	留学で得た探究結果を事前に調べた情報と照らし合わせ、まとめました。そしてクリーンビーチいしかわに探究報告をするための資料を制作中です。	③留学後 (成果・結果)	成果発表会で海洋問題について詳しい方に説明を行ったとき、石川県の海洋問題に関する情報を教えて頂いたり、質疑応答を通して発表の評価をしていただいた。その他、発表を聞いてくれた方々からの反応が良く、少しは石川県の海洋ゴミ問題について知ってもらう機会にできた。
(5)問いに対する答えと考察		国や市が海洋問題に対して強い意識を持っていて、ごみ箱の設置やポイ捨てに対する罰金制度、ボランティアの受け入れなどお金をかけてきれいな砂浜を保っている 住民の意識では思っていたよりも海洋問題に関心が無かった 国や市が海洋問題への取り組みを目に見える形で積極的に行っていることで、それが地域のルールとして定着していると感じた。住民も土に還る素材の袋を使用するなど環境に配慮し、ポイ捨てをしない雰囲気が広がっているため、砂浜のきれいな状態が保たれている。しかし、ビーチが常にきれいに保たれていることで問題が身近に感じられなくなり、クリーンビーチ活動や海洋問題への関心が薄まっているのではないかと考えた。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		色んなビーチを巡って比較できたこと、インタビューの際に相槌やありがとうなどしっかりと言うことができました。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		もっと現地の人にインタビューをすればよかったです。地元の人には断られることが多くて勇気がでなくなってしまったことが要因だと思います。現地の人の中には当然答えてくださる優しい方もいたので当たって砕けろ精神で積極的に話しかければもっとよいアンケート結果がでたと思いました。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		今回の探究活動から海の美しさを守るためには、地域の協力とそれを持続させる事が大切だということを学びました。国や市、市民が協力しないとオーストラリアのビーチはきれいに保たれていないだろうし、全員がきれいな状態を守ろうとしたから今があると思うので協力はとても大切だと学べました。今後は清掃ボランティアに積極的に参加したり、海に行った際には「ゴミを持ち帰る」を徹底したいです。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	オーストラリア・ブリスベンで得たクリーンビーチ政策の例は石川県で実施しても良い成果が得られるのかどうか。		
	活動内容	実践として石川県の砂浜のあるところにゴミ箱(燃えるゴミ、燃えないゴミ)を複数ヶ所に設置しそのゴミ箱にポイ捨てや海洋問題についてのポスターのようなものを貼り、現在海洋問題がどれほど深刻で現実的な問題なのかを伝える。清掃ボランティアは現在の「クリーンビーチいしかわ」が運営する清掃スケジュール通り進行する。		

Ｎｏ	19

(1)探究活動の問い		”石川から日本へ　新たな子育ての在り方をめざしてカナダの子育てから得られるヒントは？”		
(2)探究活動の背景・動機・目的		周囲に幼い子どもが多く、自分自身の将来のライフステージを考えた際、「より良い子育て環境とは何か」に興味を持ちました。「カナダの子育ては自由」という知見をきっかけに、日本の子育て環境をより良くするためのヒントを得ることを目的としました。		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		カナダは個人の自由を尊重する文化が根付いているため、日本よりもルールに縛られず、のびのびと子育てができる環境が整っているのではないか。日本よりもカナダの方が、親子にとってストレスの少ない理想的な環境であると予想しました。		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 （活動内容等）	カナダで主流の子育て方針について事前調査を行い、現地の保育施設へ訪問許可を得るためのアポイントメントをとりました。また、日本とカナダの教育システムの違いについても基礎的な知識を整理しました。	①留学前 （成果・結果）	調査を通じて、カナダでは校則などの細かな制約が少なく、子どもの個性を尊重する「自由な子育て」が一般的であるという情報を得ることができ、現地調査への期待が高まりました。
	②留学中 （活動内容等）	現地の公園で親子連れと一緒に遊びながら交流を図り、子育て中の方々にインタビューを実施しました。特にカナダで出産・育児を経験した日本人の方々から、両国のリアルな違いについて詳しくお話を伺いました。	②留学中 （成果・結果）	意外にも「医療制度や確実性の面で日本の方が安心」という声が多く聞かれました。一方で、日本は「自由や個性の尊重、多様性への理解」が不足しており、精神的な窮屈さを感じているという課題も浮き彫りになりました。
	③留学後 （活動内容等）	帰国後、現地のインタビューで得た「日本の制度の質の高さ」という意見を検証するため、日本の最新の育児支援制度や少子化対策について改めて調査・整理を行いました。	③留学後 （成果・結果）	調査の結果を俯瞰すると、日本は世界的に見ても制度自体は非常に充実していることが分かりました。しかし、カナダで感じたような「個を認める精神的な寛容さ」が不足していることが、日本での子育てのしづらさに繋がっているという具体的な改善点が見つかりました。
(5)問いに対する答えと考察		「カナダの方が圧倒的に良い」という単純な結論ではなく、日本の制度の安定性とカナダの多様性・自由度の高さを組み合わせることが理想だと考えます。互いの国の良さを認め、柔軟に取り入れる姿勢が、より良い子育て環境の鍵となります。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		持ち前のコミュニケーション能力を活かし、公園などで初対面の方々からも快くアンケートやインタビューの協力を得ることができました。実際に出産を経験した当事者の生の声を直接聞けたことは大きな収穫でした。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		事前に施設へアポイントメントを取っていましたが、スケジュールの調整が難しく、実際の訪問見学まで至らなかったことが反省点です。事前の段取りや余裕を持った計画作りの重要性を学びました。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		今回の活動を通じて、理想的な子育て環境には「制度面の充実」と「社会全体の寛容さ」の両輪が必要であると学びました。日本の優れた制度を維持しつつ、カナダで感じた多様性を尊重する意識を広めることが、少子化を食い止める鍵になると考えます。今後は、自分にできることとして、まずは身近な親子の困りごとに気づき、手助けをするなど、寛容な社会づくりの一歩を日常生活から実践していきます。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	日本の若者が抱く「子育てへの不安」の正体は何か。北欧などの先進事例を参考に、日本独自の「心理的ハードル」を下げる仕組みを探る。		
	活動内容	・本音を聞く： 周りの友達や大学生が、将来の子育てにどんな不安を感じているかアンケートをとる。 ・ヒント探し： 子育てがしやすいと言われる国の事例を調べ、日本でもマネできそうな工夫を見つける。 ・アイデア出し： 若者の不安を減らすための新しいアイデアや、地域での助け合いの方法を考えて提案する。		

No	20

(1)探究活動の問い		災害時にも安定して水を利用できる日本の社会を目指して、シンガポールの水再利用技術や分散型インフラはどのように応用可能か？		
(2)探究活動の背景・動機・目的		能登半島地震の被害を受けて、石川を災害に強い地域にするために水への向き合い方や備えを見直したい		
(3)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		NEWaterを活かすことができるのではないかという仮説を立てて、		
(4)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 (活動内容等)	・能登半島地震について調べる ・日本の水インフラについて学ぶ ・日本の水処理所の見学	①留学前 (成果・結果)	・能登半島地震の断水は凄く長く続いており、迅速な水供給の対応ができていない ・日本は普段の水インフラは優れているが、災害時に弱い ・NEWaterが迅速な水供給に繋がると考えた
	②留学中 (活動内容等)	・NEWater施設や水に関する展示・資料を通して、再生水の仕組みや安全性を 学んだ ・再生水が工業用水だけでなく、飲料水源の一部としても利用されていることを知った ・現地の人々が、水を限りある資源として意識し、日常的に節水や水教育に取り組んでいる様子を観察・交流を通して確認した	②留学中 (成果・結果)	・再生水は「非常用」ではなく、日常的に使われているからこそ災害時にも機能すると分かった・技術だけでなく、市民の理解と信頼が水インフラを支えていることを実感した
	③留学後 (活動内容等)	・シンガポールと能登の水インフラを比較し、地理条件や人口規模の違いを整理した ・能登では大規模施設の導入が難しい一方、簡易型の再生水設備や仮設プラントなら導入可能ではないかと考察した	③留学後 (成果・結果)	・NEWaterの技術そのものをそのまま導入するのではなく、「平常時から使える再生水」「市民理解を伴う水教育」を組み合わせることが重要だと結論づけた ・災害に強い水インフラには、技術・運用 ・意識の三つがそろう必要があると考えるようになった
(5)問いに対する答えと考察		シンガポールの水インフラを調べた結果、NEWaterは高度な再生水技術であるだけでなく、平常時から社会に組み込まれている点が大きな特徴であると分かった。再生水が日常的に工業用水や飲料水源の一部として利用されているため、災害時にも特別な切り替えを必要とせず、安定した水供給が可能となっている。一方、能登の断水では、代替水源が限られており、復旧までに時間がかかった。この違いから、災害に強い水インフラには、非常時のみを想定した設備ではなく、通常時から使われている複数の水源を持つことが重要だと考えられる。		
(6)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		様々な人に話しかけ、施設の方と対面やメールで質問をすることで、問題についてよく学び、よりよい策を考えることができた。		
(7)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		伝えたい言葉を英語で表現することができなかった。英語能力が足りていないことが要因として考えられるので、もっと勉強や英語でのコミュニケーションをする機会を積極的に増やす。		
(8)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		何事も恐れずに行動することが大切。勇気を出して沢山挑戦することが人生を楽しむことに繋がる。		
(9)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	海の一部を貯水池へにすることで断水時に迅速に対応することができるか		
	活動内容	能登の地形を生かして、能登に貯水池を作る		